



第19回 全国児童館・児童クラブ大会 えひめ

－ 報告書 －

(主催)
愛媛県児童館連絡協議会
全国児童厚生員研究協議会
一般財団法人児童健全育成推進財団
全国児童館連絡協議会

(主管)
第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ実行委員会



もくじ

・ 概要	1
・ プログラム	2
・ オープニング・開会式	3
・ 開会宣言・主催者挨拶	4
・ 来賓挨拶	5
・ ゲストトークセッション	9
・ 分科会(1～8)	12
・ 交流会	28
・ エンディング・閉会式	30
・ 分科会報告	30
・ 全国発議	32
・ 閉会宣言	33
・ 特設コーナー	34
・ オプション視察	35
・ 学生ボランティアスタッフより	36
・ メディア掲載	37
・ 実行委員会名簿	37



概要

【目的】

全国の児童館・放課後児童クラブやこども・子育て支援等の関係者が一堂に会し、こどもの育ちや子育ての現状を共有するとともに、児童の健全育成の推進に資する人的ネットワークを構築することを目的とする。

また、こども基本法(令和4年法律第77号)の理念や「こどもの居場所づくりに関する指針」(令和5年12月22日)を踏まえ、あらためてこどもの居場所や遊びの支援等について研究協議を深め、これからの児童館活動の拡充を目指したこども・子育て支援のあり方を考察する。

【テーマ】

『ふらっと(flat)いこうや』

- こどもたちが自らの意思で利用できる児童館だからこそ、気軽に来館して欲しいとの想いを込めています

【開催日】

2025(令和7)年2月15日(土)・16日(日)

【会場】

松山市総合コミュニティセンター(愛媛県松山市湊町7丁目5番地)

【対象者】

児童館長、児童厚生員、放課後児童支援員、行政担当者、研究者等

【主催】

愛媛県児童館連絡協議会、全国児童厚生員研究協議会、
一般財団法人児童健全育成推進財団、全国児童館連絡協議会

【主管】

第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ実行委員会

【後援】

こども家庭庁、愛媛県、松山市、今治市、宇和島市、八幡浜市、新居浜市、西条市、大洲市、伊予市、四国中央市、西予市、東温市、上島町、久万高原町、松前町、砥部町、内子町、伊方町、松野町、鬼北町、愛南町、社会福祉法人全国社会福祉協議会、児童厚生員養成課程連絡協議会、民間児童館ネットワーク、全国地域活動連絡協議会、愛媛県VYS連合協議会、愛媛県地域活動連絡協議会、松山みらいクラブ連絡協議会、愛媛新聞社、南海放送、テレビ愛媛、あいテレビ、愛媛朝日テレビ、FM愛媛、愛媛CATV (順不同)

【協力】

松山東雲女子大学、松山東雲短期大学、松山大学、聖カタリナ大学、聖カタリナ大学短期大学部、今治明德短期大学 (順不同)





プログラム

2月15日(土)

13:00

◆オープニング・開会式
オープニング・パフォーマンス

◆ゲストトークセッション
「社会を変える人を育てる」



15:00

15:20

◆分科会Ⅰ
(第1～8分科会)



17:00

18:30

◆交流会

20:30



2月16日(日)

9:15

◆分科会Ⅱ
(第1～8分科会)

11:00

11:30

◆エンディング・閉会式
分科会報告・全国発議

12:30

13:00

◆オプション視察





オープニング・開会式



私たちは、顧問・阿部秀信教諭の指導のもと、中高一貫校の特徴を活かしながら、松山市久枝児童館などの地域イベントにも積極的に参加しています。

中・高校生を合わせた大勢の部員が書道パフォーマンスの動きなどを切磋琢磨しながら練習し、日ごろは各自の作品制作を通じて、互いの成長を日々感じています。(書道部員より)

パフォーマンス後に今後の抱負を伺うと、「みんなで支え合いながら、みんなで前進すること。誰も一人では成長できないから、みんなで力を合わせてがんばります!」と笑顔で答えてくれました。

今回のパフォーマンスでは、『支え愛(ささえあい)』という言葉を中心に、「児童館・児童クラブのみなさんが楽しく支え合っていけたら」と願いを込め、暖かくて優しい言葉を大きな紙面いっぱいに表現してくださいました。



〔司会〕 山下 順平(松山市南部児童センター) ・ 藤原 伊津子(松山市中央児童センター)

→ 開会宣言



第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ実行委員会

委員長 ^{しきむら かずもと} 敷村 一元

えひめへようこそ。いま、私たち大人は「こどもたちから聴く力」、そして、「実行する力」を発揮するときです。

『第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ』を開会いたします。

この2日間、みなさんでしっかり学んで、明日に繋げていきましょう。

→ 主催者挨拶



一般財団法人児童健全育成推進財団

理事長 ^{すずき かずみつ} 鈴木 一光

『第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ』によくお越しく下さいました。主催者を代表して、皆様を心から歓迎します。

この大会は、30余年前に東京の児童館の有志が、「児童館は、飯を食うための種の仕事じゃない。こどもを通して社会を豊かにする、社会貢献を行う転生天命の仕事だ」ということを確認しながら、「児童館もっと頑張ろう」と集まった約50人が発起人となってスタートしました。

それが全国に広がり、平成7年2月11日、東京で第1回目となる大会が開催されました。

その25日前、阪神淡路大震災が起きました。この情報も確認しながら、それ以降も2年に1回のペースで、公的な組織や団体からのご支援をいただきながら運営を行なってきたところです。その間にも、こどもの問題はさまざまに起こりますが、児童館・児童クラブが力を合わせて、その対策に寄与してきたつもりです。

ところが、政府と関係各位の努力にも関わらず、近年の少子化問題は歯止めがかからず加速している状況です。50年前、3,000万人を超えるこどもの数が、去年は1,401万人になりました。50年先の予測は797万人です。

こどもの数が減り続けるということは、「日本が減ぶ」ということです。そして、「文明が崩壊する」ということです。これは世界的な兆候であって、300年経つと世界人口は100分の1になります。

この状況を打開するためには、「こどもを育てることは、人生において意味のあること」であるとメッセージとして発信しながら、少なく生まれたこどもたちを誰ひとり取りこぼすことなく、健全に育成していくことが何よりも大切です。そのためには、こどもが自尊感情を持って、たくましく生きていけるようにしなければならないわけですが、この自尊感情は自分個人で高めることはできません。

乳幼児期に親御さんに愛され、児童厚生員のような社会の大人に認められ、友達や仲間から認められ、それで高まるものが自尊感情です。本大会もそれを縦軸に、児童福祉法の施行以来、「こどもの居場所」として貫いてきた、こどもに接する姿勢を横軸に分科会が構成されています。

「えひめ」で思い出すのは、元経済企画庁長官の塩崎潤（しおぎき・じゅん）先生です。昭和40年代後半から、児童館の議員連盟の会長を長年務められ、私どもを励まし、児童館を伸ばしてくださいました。今回も多くの方々のご支援があって、本大会が成り立っていることをご紹介します。皆様とともに感謝したいと思います。

まず、こども家庭庁に後援名義をいただき、三原じゅん子大臣がご祝辞を送ってくださいました。そして、こども・子育て支援に普段からご尽力いただいております、愛媛県ご選出の3名の衆議院議員の方々、愛媛県松山市を中心に、多数の来賓の方にご出席いただいております。また、県内の各市町、児童館関係者、企業の方々からもご後援やご協賛をいただきました。これに、心から厚く感謝を申し上げたいと思います。

結びに、本大会にご尽力いただいた児童館の諸氏に心から敬意とともに感謝を申し上げます。この2日間、楽しいなかにも実り多き大会となることを祈念し、主催者のご挨拶とさせていただきます。

→ 来賓挨拶

内閣府特命担当大臣(こども政策 少子化対策担当) ^{みはら}三原 ^こじゅん子 様
〔祝電披露〕

『第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ』の開催にあたりご挨拶を申し上げます。

本日ご参加の皆様におかれましては、日ごろより、こどもたちの健全育成や子育て支援にご尽力いただき、心より感謝申し上げます。また、本大会が19回目を迎えられましたこと、そして、コロナ禍を経て、久しぶりに一堂に会して開催されますことを心からお慶び申し上げます。

さて、こども家庭庁は、「こどもまんなか社会」の実現を目指し、こども政策の司令塔として、昨年度発足いたしました。こども・若者子育て当事者、子育て支援に携わる皆様を取りまくさまざまな課題に取り組んでおりますが、近年、地域コミュニティの希薄化などにより、こどもの居場所が失われつつあるという課題に直面しています。

児童館は、長らく地域のこどもの重要な居場所として活動されてきたものと承知しております。こども家庭庁として、皆様の活動を後押しすべく、令和5年12月に閣議決定した『こどもの居場所づくりに関する指針』を踏まえ、児童館の今後のあり方について、こどもの権利を尊重した取組強化等の観点から、『児童館ガイドライン』を改正し、来年度から施行することとしています。

また、小学生の放課後の居場所である放課後児童クラブについては、ニーズの高まりに応じた受け皿の確保を進めていますが、引き続き待機児童が多く発生している状況です。昨年末に文部科学省と連携してとりまとめた『放課後児童対策パッケージ2025』に基づき、更なる受け皿の確保に向けた支援を強化してまいります。

今後とも、こども家庭庁としては、これらの取組を通して、児童館・放課後児童クラブがますます発展され、こどもたちの健全育成を図るうえで、大切な「こどもの居場所」で在り続けていただくことを心より期待しております。

結びになりますが、本大会の開催に御尽力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本大会に参加された皆様の日頃のご尽力に重ねて御礼申し上げるとともに、益々のご活躍をお祈りし、本大会が実り多きものとなるようご期待申し上げ、お祝いのご挨拶といたします。



衆議院議員 ^{しおざき あきひさ} 塩崎 彰久 様

本日、『第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ』が盛大に開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。

昨年の大会は全国をオンラインでつなぎ、私は厚生労働大臣政務官として東京会場から参加しました。今年は地元・愛媛松山で、全国各地の児童館・児童クラブの職員や関係者の皆さまが一堂に会し、対面で開催できることを大変嬉しく思います。

先ほど、児童健全育成推進財団の鈴木一光理事長から私の祖父についてのお話を伺い、長年のご縁とこども政策の歩みを改めて実感しました。また、私の父も厚生労働大臣として児童養護や里親制度の支援に尽力し、制度改革に取り組みました。

私が児童館と関わるきっかけをくださったのは、全国児童館連絡協議会の敷村一元会長です。児童館の職員の皆さんからお話を伺う中で、こどものお世話の重要性や、こどもの声を政策に反映することの大切さを学びました。

この経験を通じて、私が議員になって最初に取り組んだ議員立法がこども基本法です。まだ議員になって1年も経たない中、共同提案者として与党の先生方の質問に答え、こどもを政策の権利主体として位置付けること、また、こどもの意見を政策に反映する重要性を訴えたことを今でも鮮明に覚えています。

昨年、こども行政は厚生労働省からこども家庭庁に移管されました。しかし、こども政策は福祉政策と切り離すのではなく、全世代型の社会保障の一環として、切れ目なくつなげていくことが重要です。今後も厚生労働省とこども家庭庁が連携を強化し、私もその取り組みを後押しして参ります。

結びに、全国大会の開催にご尽力いただきました皆さまに、心から感謝と敬意を申し上げますとともに、本日がこどもたちの明るい未来を開く大きな一歩となることを心から祈念いたしまして、お祝いのご挨拶とさせていただきます。



衆議院議員 ^{いしい ともえ} 石井 智恵 様

この度は、『第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ』のご開催、誠におめでとうございます。

私には現在、25歳と32歳の娘がおりまして、シングルマザーでこどもを育てていましたので、娘たちが小学生のときには学校が終わった後、放課後児童クラブに大変お世話になっていました。おそらく学校から帰って、こどもたちは、学校の様子や、友達のことなどを児童クラブの先生に話を聴いてもらっていたと思います。

働いている親などにとって、児童クラブはなくてはならない存在でした。こどもが安心して過ごせる居場所があることは、子育ての中で非常に重要なことであると思います。

そして今、こどもの中には困難を抱えていても、声を出せないこどもたちがいます。昨年の自殺の件数は児童・生徒の自殺が過去最高であったとの報告もありました。そして、ヤングケアラーと言われるこどもたちの実態も明らかになってきました。しかし、こどもたちはその困った状況を打ち明けることができず、いつの間にか悩みが深刻になり、相談できないまま抱えてこんでしまっております。

そのような時に、児童クラブなどで周囲の大人や友達が気づいて、こどもたちの何気ない会話からSOSをキャッチアップし、支援につなげていく必要があります。また、地域社会で連携をして孤立しているこどもたちを救



っていけるようにしていくことが今後さらに求められ、児童館・児童クラブの役割はより一層重要になってまいります。

生まれてくるすべての子どもたちが健やかに育っていく環境をつくっていくために、国や、自治体、そして児童館・児童クラブの皆様がともに繋がって、子どもが安心して過ごせる環境をつくってまいりましょう。

益々のご発展をお祈り申し上げ、お祝いのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

衆議院議員 は せ が わ じ ゅ ん じ 長谷川 淳二 様

『第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ』が、コロナ禍を乗り越え、ここ愛媛県にて開催されますことをお慶び申し上げますとともに、地元選出国會議員として、ご来県の皆様を心より歓迎申し上げます。

児童館・放課後児童クラブ関係者の皆様におかれましては、共働き家庭などの児童が安全で楽しく様々な体験を通じて健やかに成長できるよう、日々ご尽力をいただいておりますことに、深く敬意を表し、心より感謝申し上げます。

こども基本法の基本理念に基づき、「こどもの居場所」づくりにおいても、こどもの意見が尊重されることが求められる中、一般財団法人児童健全育成財団をはじめ、児童館・放課後児童クラブ関係者の皆様に寄せられる期待は益々大きくなるものと思います。私も、児童館・放課後児童クラブの活動・運営に対する支援の強化に力を尽くしてまいります。

結びに、本大会のご成功とともに、こどもまんなか社会の実現に向け、児童館・児童クラブ活動が力強く前進されますよう祈念申し上げ、お祝いの言葉いたします。



愛媛県知事 な か む ら と き ひ ろ 中村 時広 様
〔代読〕愛媛県副知事 濱里 要 様

『第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ』の開催をお喜び申し上げますとともに、全国各地から御来県された皆様に心から歓迎いたします。また、児童の健全育成に対する、皆様の日頃からの御熱意と御努力に対し、深く敬意を表します。

御案内のとおり、国を挙げて「こどもまんなか社会」の実現に向けた取組が進められている中、全国の児童館や児童クラブにおいて児童の健全育成に御尽力されている皆様が一堂に集い、意見や情報を交わし、互いの交流を深められますことは、誠に意義深いものと存じます。

本県といたしましても、児童館や児童クラブが地域における児童の健全育成の拠点としての役割を十分発揮できるよう支援に努めているほか、県が設置する大型児童館『えひめこどもの城』の一層の魅力向上に向け、近隣施設との連携を含むハード・ソフト両面からの取組を進めているところであり、明日の同館の現地視察が皆様の御参考となれば幸いに存じます。

御参加の皆様にとって、本大会が実り多く、今後の御活動の更なる発展につながるものとなることを祈念申し上げます。開催地からの御挨拶いたします。

松山市長 野志 克仁 様

〔代読〕松山市副市長 田淵 雄一郎 様

本日ここに『第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ』が盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、全国各地から多くの方に松山市へお越しいただきましたことに、市民を代表して歓迎を申し上げます。

近年、こどもの貧困やヤングケアラーといった諸問題が取りざたされる中、社会全体でこども・若者、そして子育て家庭を支援する環境づくりに取り組む必要があります。特に、児童館や児童クラブはこどもの生活の一部として、ますます重要な役割を果たすと考えており、本日ご出席の皆様が、現状の共有やネットワークの構築、知識や技術の研鑽に取り組まれますことは大変意義深く、こどもの育ちにとって大きな一助になることと思います。

松山市では、今年度、こども計画を策定するとともに、企業や団体が取り組んでいるこどもや若者、子育て家庭を支援する優れた活動を表彰する「こどもまんなか大賞」を創設するなど、こどもまんなか社会の実現に向けて取り組んでいます。

皆様には、本日の会で得た知識や学びを糧に、それぞれ活躍されている場所でそのお力を遺憾なく発揮されますことをご期待申し上げます。また、この機会に、松山城や道後温泉など本市が誇る歴史や文化などをお時間の許す限りご堪能いただければ幸いです。

結びに、本日の会が皆様にとって実り多いものになりますことをご期待申し上げますとともに、皆さまのご健勝とご多幸を祈念いたしまして、お祝いの挨拶とさせていただきます。





ゲストトークセッション

社会を変える人を育てる

一人ひとりが主体性を持ち、「人間力」を高める

社会が大きく変わっていく中で、ともに育ちあい予測できない未来に向かい、大人こそ考え方を大きく変えていかなければなりません。

多様性を認め合い、協働し、主体性をもった人材を育てることを通じて、これからの大人の教育、福祉のありかたについて一緒に考えます。



【登壇者】

おかだ たけし

岡田 武史 氏（株式会社今治・夢スポーツ 代表取締役会長）

早稲田大学政治経済学部を卒業後、古河電気工業サッカー部に入団し、日本代表に選出。引退後は日本代表監督で2度のW杯指揮、コンサドーレ札幌監督、横浜F・マリノス監督、中国スーパーリーグの杭州绿城監督を歴任。2014年にFC今治オーナー就任。AFC（アジアサッカー連盟）最優秀監督賞、Jリーグ最優秀監督賞、日本サッカー殿堂入りなど受賞歴多数。



にのみや さとし

二宮 敏 氏（株式会社 NINO 代表取締役）

2013年、松山市にてデザインスタジオ NINO INC. を設立。企業や自治体のブランディング、アートフェスティバルやまちづくりにおいて物事の本質をリサーチし、ジャンルを超えたコミュニケーションデザインで潜在的な魅力を可視化する活動を行っている。FC今治コミュニケーションディレクター、東京藝術大学共創拠点推進機構 地域コーディネーター。



【コーディネーター】

ともかわ あや

友川 礼 氏（松山東雲女子大学 人文科学部 心理こども学科 准教授）

愛媛のこどもや子育て家庭に関わる福祉・医療・保健・教育・心理・司法等の専門職を対象に、こども虐待への対応力向上やこどもの居場所づくり推進などに関わる。内閣府こども家庭庁こどもの居場所部会委員、児童館における健全育成活動等開発事業検討委員会委員、えひめこどもの城運営委員会会長。



◆ 教育・人材育成のキーワード 「主体性」

サッカーや教育活動を通じて、「教育は社会に出る準備」という前提から、今の社会はAI・ICTにより「便利・快適・安全」が充実し、こどもは困難やプレッシャーから遠い状況にいることに、岡田氏は危機意識を感じています。

10年後の状況も予見できないほど、社会は急速に変化する。だから、『ロールモデル』が見つけにくい。では、「何が正解か」が誰も分からない状況で、教育や人材育成はどう考えていけばよいか。

私は、大人が自分の経験を教えるより、こども自身が「自分が成長したい」と思える、主体性を育んでいける環境や関わりが大切だと考えています。



ここでは、主体性と自主性の違いに触れ、自主性とは「決められたことを上手くやり遂げるために積極的に動き、創意工夫すること」に対して、主体性とは「自分でやることを決め、(やり遂げるために)自分で考えて、自分で行動すること」と紹介。

教育の軸は、こどもの育つ力を邪魔しない、見守り・寄り添いのスタンスに立ち、「自分が成長したい」という思いを育む主体性を重視されています。

◆ 成長の機会としての 「ERROR&LEARN (エラー・アンド・ラーン)」

サッカーで世界と戦った経験や教育界での経験から、ヒトは困難やプレッシャーに直面したときに、潜在能力が最大限に発揮される「遺伝子にスイッチが入った」体験を振り返ります。

(サッカーや教育界で経験したエピソードを例に)

ヒトは、失敗した時やピンチに直面した時、「なぜ上手くいかないのか？」と状況理解や課題分析を行い、「次はどうしたらいいか？」といった修正や解決に向けたアイデアを一生懸命考えます。

学び(ラーン/LEARN)とは、「どうしたらいいか」と必死に考えて行動する時です。



一方で、失敗(エラー/ERROR)させないように、「こどもから危険を除去し過ぎる環境」に警鐘を鳴らします。大人が先回りし、こどもにとっての困難やプレッシャーを感じる体験を排除してしまうことは、せっかくの成長の機会『ERROR&LEARN(エラー・アンド・ラーン)』も同時に失われると述べられました。

◆ 主体性を尊重した関わり 「3つの質問」

こどもの主体性を軸に置いた大人の関わりについて、困難やプレッシャー、危機に挑戦しているこどもに対して行なっている『3つの質問』の意図を紹介。

【質問①】

「きみはどうしたい？・何がしたい？」《考える機会をつくる》

【質問②】

(考えても自分で見つからない時は、いくつかの選択肢を出し、)

「どんなのがいい？どれがいい？」《本人が考えて決めて行動する》

【質問③】

「大人(他者)が何か手助けできることはある？」《つながりや助言の活用を考え、選び、行動する》

「効率や成功を意識して、大人が手を出し過ぎないこと」、「(スムーズな課題解決のための)大人の考えはこどもに伝えず、信じて待つ」スタンスも示され、「もし何かあったとしても、決して見放さない」というメッセージを、言葉・態度・ルールを通して伝え続けることが大切だと訴えました。

◆ 人間力を高めるための多様性を育む経験とは 「芸術・文化・スポーツの豊かさ」

先に述べた「主体性」とともに、「多様性(違いを認め合う)」も人間力の一つとして重要と考える岡田氏は、「日本社会は日常的に同調圧力が強く、それぞれの違いに対して折り合いをつけることが苦手」と指摘します。

多様性を育むためには、共通の目標・目的を意識し、落としどころをみつける対話と経験が重要。特に、芸術(アート)・文化・スポーツは、自分と異なる感性に触れる機会が作りやすい。こうした「相手の領域に踏み込みやすい分野」が、多様性を育むフィールドに適しているのでは。

二宮氏は、正解を求めない対話や他者の違いを受け入れやすい芸術(アート)の分野に的を絞り、共助のコミュニケーションベースックインフラを整備した具体例として、愛媛県内の児童館で行なった『対話型鑑賞』と『ひめラー(えひめこどもの城×東京藝術大学の協働事業)』を紹介し、児童館×企業・大学×地域等とのコラボレーションイメージを共有されました。

◆ 主体性・人間力・多様性は地域社会の中で育てる

岡田・二宮両氏は、「こどもは、地域住民との日常的な交流や地域行事から文化・慣習を知る機会が薄れており、自分たちの身の周りのことを知らない」という課題意識から、高校生が地域に入り込む経験重視プログラムを構築。自分が学んでいることや身につけた力が、身近な社会または世界で生きていくうえでどのようにつながるか、地域住民や地元企業の方と関わった実践例を挙げ、参加した高校生の影響などを紹介しました。

「困難な時もすぐには助けない、こどもが考え、行動し失敗する学びの機会を奪わない」という方針を全ての大人に説明し、その協力を得るために、保護者や地域住民と日常的な対話の時間をもつなど、地道な働きかけの裏話も話されました。

また、二宮氏は、地域の課題(問題)だけでなく、身の周りにある地域の豊かさや魅力に目を向ける視点意識の発掘を示唆。岡田氏は、知識力だけでなく、地域・社会に主体的に関わる経験が評価される社会変化の例や、実社会を動かしているさまざまな立場(大企業の経営者、プロスポーツ選手など)の方から、ピンチに直面したときの体験談を聞いたことなどを具体例に、その重要性について述べられました。

地球は未来から借りているもの——。次世代に生命をつないでいくために、何をしなくてはいけないかを考える『自然環境教育』が世界で普及している点についても言及されました。



◆ まとめ

『社会を変える人を育てる』をテーマに、こども一人ひとりが主体性を持ち、人間力を高めるために、大人が何を大切に考え、どのようなスタンスで関わっていけばよいのか、異分野で活躍するゲストとともに深掘りしたトークセッション。スポーツ×教育×経営者(岡田氏)と、建築×コミュニケーションディレクター×企業(二宮氏)のお立場から、さまざまなお話をお伺いすることができました。

一見すると、我々とはかけ離れた世界の話かと思いきや、「こどもとの関わり方におけるスタンス」や「未来の日本を担っていくこどもに対する価値観」など、日ごろから私たちが現場で実践している部分との共通点が非常に多く、のちの分科会テーマへとつながっていく有意義な時間となりました。

このトークセッションが、「児童館・児童クラブがこれまで大切にしてきたことへの確信」と「これからも歩みを進めていく方向の再確認」の機会となったならば幸いです。



第1分科会

【こどもの声を聴く】

『実演！こども会議』 ～こどもの声、どう聴く？どうつなげる？どう動く？～

『こどもの声を聴く』ためのこども会議を開催し、こどもたちがいま何を思い、何を感じているのか、リアルな声を聴いていきます。そこから私たち大人がどのようにつなげ、動けばよいか大人の底力を見せましょう。

1 概要

1日目は、日ごろから児童館を利用している10名のこどもたちによるこども会議を実践。参加者にこどもの生の声を聴いてもらいました。

2日目は、自身の児童館・児童クラブ・その他施設の環境がそれぞれ異なるなかで、どのようなこども会議ができるかを話し合いました。また、県内の児童館で開催したこども会議のチラシをベースに、新たなチラシを作っていくワークショップも行いました。

【1日目】

2 こども会議

運営スタッフが各々の児童館で呼びかけた10名のこどもたち。もちろん、当日初対面の状態です。当初は、その緊張を少しでも和らげるために、別室のこども会議を中継し、メイン会場のスクリーンに投影したものをみなさんに観ていただく予定でした。

しかし、大会当日の午前中のアイスブレイクが、こども同士の心の壁をフラットにしたのでしょうか。「ステージ上できる!」、「中継じゃなくても大丈夫!」と意外な言葉が出てきます。内心、本当に大丈夫?と不安がよぎりましたが、この心強い声がきっかけとなって、よりリアルな雰囲気が伝わる、参加者の目の前でこども会議開催が実現しました。

大きな会場でも物怖じしない、胆力のあるこどもたちの姿に驚かされたのと同時に、今日初めて会った人でも、すぐに仲良くなれるこどもの柔軟性に感服しました。

会議のテーマは、『学校と児童館の違いと、あったらいいもの』。これは、分科会が始まる前にこどもたちが決めました。

会議では、「学校は制服で行くけれど、児童館には私服で行くよね」、「児童館はジュースやお菓子を持って行けるけど、学校には持って行ったらいかん(ダメ)よね」など、学校と児童館の違いを話したほか、「僕が行ってる児童館は、ボールの時間が20分」という意見に対し、「え～! 私の児童館は15分!」、「うちは10分や! いいなあ」など、それぞれ行きつけの児童館のルールの違いなどを発表し合い、「ボールの時間は揃えて欲しいよね」と児童館に対する要望なども出てきました。



そのほか、「児童館にブリクラを置いて欲しい」、「児童館で勉強を教えて欲しい。高校生が中学生を、中学生が小学生を教える感じにしたら良さそうよね」などの、あったらいいものだけでなく、どうすればより実現しやすいかという、実現に向けたための糸口も見出してくれました。

最後には、それぞれが通っている学校の特色や給食の話で盛り上がりました。学校や学年も異なるなかで、共通点を見つけたり、違った点を話し合ったりと、まるで児童館の一室にいるような楽しい雰囲気で会議を終えることができました。

【2日目】

3 大学生による事例発表

2日目は、愛媛県・えひめこどもの城・松山東雲女子大学の官民学が連携実施している『こども若者★いけんぷらす』の活動について、松山東雲女子大学の学生による事例発表からスタート。

『愛媛県のこども・若者を対象とした意識調査』と題したアンケートは、「休日の過ごし方・県内にあればいいもの」などの設問で構成され、学生自らが商業施設や児童館などに赴き、こどもや若者から意見を聴取したものです。

学生は、自分たちの調査結果を全国大会の場で発表できたことが、自信につながりました。



4 グループワーク



こども会議を自身の児童館・児童クラブや大学、行政ではどのようにすれば実施できるのか、開催する上での注意点は何か、集めた声をどうするのかなどを話し合いました。また、それと並行し、会議の募集チラシも作成しました。

ここでは、1日目の会議に登壇したうちの6名のこどもも参加。愛媛県の特徴や学校のこと、前日のこども会議での話題をこどもに質問する時間もありました。グループの構成は大人8名に対しこども1名程度。まさに「社会の縮図」のような集団のなか、こどもは大人からの質問に対し、自分の思いや考えを一生懸命答えていました。

5 まとめ

1日目は、植木 信一氏(新潟県立大学教授)、2日目は、友川 礼氏(松山東雲女子大学准教授)にご意見と総評をいただきました。

植木氏は、「こどもの声を聴く方法はこども会議だけではなく、児童館活動のなかでさまざまな機会がある。その何気ない言葉も大切にしていかなければならない」、「できる・できないだけでなく、どうしたらできるかの打開策をこどもの引き出しを借りながら一緒に考え、“できるようになった”にしていくことも、こども会議の魅力」とアドバイスいただきました。また、友川氏は、「0～18歳のこどもだけでなく、会議を一つのツールとして、大学生などの若者が児童館に帰ってこられるような取組がさらに広がっていくことを今後のこども会議に期待したい」とお話しされました。

私たちには、こどもが自然体の姿でポロっと言った願望や気持ちをどうくみ取るかの共感性と、どこにつなげていくかの専門性が問われます。そして、できないことは「なぜできないか」という理由を説明するフィードバックの力が求められます。こども参画の姿勢を大切に、私たちは自信と誇りを持って、こどもまんなか社会の実現に取り組んでいくことが使命だと感じました。

6 担当者より

会議の直前までノリノリだったこどもたちも、「それでは、こども会議を始めます！」から30分間、さすがに緊張したのか話がつかならず、スタッフは変な汗をかきました(笑)。それでも終了後、参加者から多数の称賛の声をいただきました。あっぱれです。みなさんには、「(何が起こるか分からない)こども会議」の様子を実際にご覧いただくことも大きな目標だったので、それも達成できました。

また2日目は、こどもを交えてさまざまな意見交換をしていただきました。本分科会でのつながりは、大きな財産です。今後も日々、全国各地でこどもと向き合って奮闘する同志として、こどもとともに動いていきましょう。

TEAM えひめ

◆東温市よしいのこども館 白川 裕介
◆松山市久米児童館 井上 伊都美
◆松山市味生児童館 石丸 真理子
◆松山市久枝児童館 久保 舞美
◆砥部町砥部児童館 小野 由美

◆松山市畑寺児童館 森田 洋喜
◆東温市よしいのこども館 児玉 愛
◆松山市味生児童館 山口 寧々香
◆砥部町砥部児童館 山本 佳子

(参加者数: 15日/49名 16日/37名)



第2分科会 【理想の児童館】

『中高生もふらっといこうや！』～現状を語り、ミライを明るく☆～

みなさんの児童館には、中高生が来てくれていますか？そもそも児童館は中高生の居場所？数年前、中高生だったあなたは どう思いますか！？若者目線で想うことや悩んでいること、理想はたくさんあると思います。中高生が来なくなる児童館に向かって進めるよう、2日間、話し合ひましょう！

全国の若い同士たち！明るいミライのために集まれ～！！

※本分科会では「中・高校生世代」を「中高生」と省略表記しています。

【1日目】

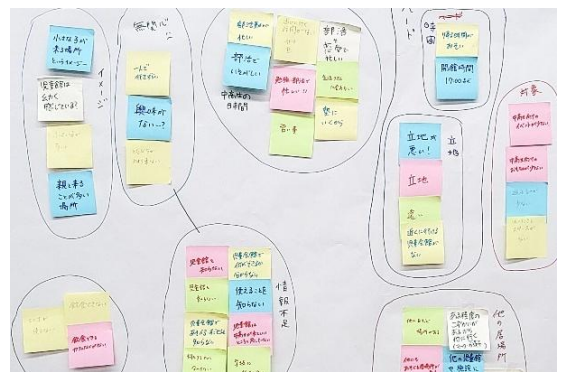
1 アイスブレイク&グループワーク①

「中高生はなぜ、児童館・児童センターに来ないの？」 —KJ法を用いて—

自己紹介とともに、「自分の市・町の自慢できるところ(いいところ)」をグループ内で発表し緊張をほぐしました。

その後、中高生が児童館に来ない理由や原因として考えられることを付せんに書き、模造紙に分類別で貼りつけました。

愛媛県南予地区の中高生約900人に取ったアンケート調査の結果をみて、児童館の認知度は高いが利用率は減っている状況に驚くとともに、中高生の思いと私たちの考えが違う点にも気づきました。



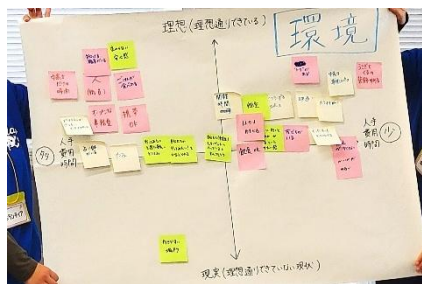
2 グループ発表「中高生に来てもらうために大事にしたいこと」

- ・「昔から変わらない独自の体験やあそびができるのが、山の中の立地を活かした児童館の魅力。利用していたこどもが大人になり、懐かしさを求めてまた来てくれている」という話を聴き、変化することに目が向けられがちですが、変わらない(不変)の大切さがあることにも気づきました。
- ・社会のなかでの児童厚生員の役割を中高生にPRすることで、将来就きたい職業をイメージしたり、親になったときの児童館利用へつながったりといった効果が期待できるのではないかと思います。
- ・中高生の考えていることが分からないというのが本音。だからこそ、私たちから積極的に知っていこうという点はみんなが一致していました。ただ、中高生が児童館に足を運びにくい現状(立地・開館時間)があつて、対面で尋ねることは難しい。中高生が日ごろから利用するSNSなどを活用し、思っていることや考えていることを積極的にキャッチしていきたいと思います。
- ・そもそも児童館を知らなかったり、小さなこどもが来る場所というイメージを持ったりしている中高生がいるのでは。中高生が児童館に興味を持ち、魅力のある居場所づくりにしていくためには、口コミによる周知ばかりに頼らず、SNSを通じた情報発信にも注力して、「中高生も来ていいんだよ」と伝えていくことが大切だと共有できました。
- ・中高生に来てもらうための大切な要素は、生活、あそび、人的・物的環境と区分しました。中高生を取り巻く環境に配慮しながら、生活スタイルや個々の性格に応じて関わるなかで、ニーズを的確に把握し、必要に応じて見直していくことが大切だと思います。あてはまるキーワードは「寄り添う」。中高生を対象としたアンケートから得た声を今後活かしていくのも、寄り添うことと同義だと考えます。



【2日目】

3 グループワーク② 「中高生が来なくなる〇〇」－マトリックスを用いて－



前日のグループ発表をもとに4つのテーマ(①環境、②イベント、③中高生の声の聴き方・活かし方、④情報発信)をつくり、自分が一番話したいグループに分かれてもらいました。

各テーマに沿って「私たちができること・やってみたいこと」をマトリックス(左図)にまとめ、理想通りにできている実践例と理想通りにできていない理由を共有。図の右下(理想通りにできていない)部分を実現または理想に近づけるためにはどうすればよいかを話し合い、出てきたアイデアなどは各自の『理想の児童館ノート』に書き記して이었습니다。

4 グループ発表

- ①(環境)「児童館の場所を変えること」以外ではできるのではないかな。中高生専用スペースやスマホ利用もどうにかすればできるし、開館時間も理想に合わせて設定するのもいい。学校帰りや塾に行く間の時間など、ニーズに合わせた工夫が利用向上につながるのでは。
- ②(イベント)「職員が少ない」など、その施設での実現が難しいこともあるが、目的や方向性が同じ人、他の団体との連携を図ることで実現の可能性が上がるのでは。連携には日ごろからヨコのつながりを意識しておかなければならない。
- ③(中高生の声の聴き方・活かし方) こどもの声を聴く方法は、意見箱やフォームを使ったアンケートなどさまざま。こども会議は中高生にとって少し抵抗があると思うので、インスタライブを活用してはどうか。ライブではコメントを自由に送れるため、意見が述べやすいのでは。
- ④(情報発信)「SNSアカウントを中高生自身が運営してみたら面白いのではないか」という意見を中心に話した。例えば、中高生のこども会議で「どのように運営していきたいか」と提案し、その意見を少しずつでも反映させながら進めていくことで、中高生が主体となった情報発信体制ができるかもしれない。



5 担当者より

中高生がやりたいことを実現できている事例に触れて感じたことは、発想の転換・変換力です。みなさんは、一見しただけで「できない」と判断し、それが惰性で続いているものってありませんか。あるいは、できないことを理由にして、自ずと規制してしまっているものってないでしょうか。

この転換・変換力を養う第一歩は、私たち大人が自分の固定観念を取り払い、本大会のテーマであるフラット(flat)な状態で、こどもの声にしっかりと耳を傾けることです。本分科会で完成させた『理想の児童館ノート』をぜひご活用いただき、中高生が来なくなる理想の児童館が今後さらに増えていくよう願っています。

そして我々スタッフは、そのほとんどが全国大会初心者。若手が中心に集まり、「やる気はあるがどうしたらいいかわからない」。そんなとき、経験のある他のスタッフがそっと手を差し伸べてくれました。そこには、「支えられて今の自分がいる」という新たな発見がありました。

全国のみなさんとつながれた自信を胸に、今回の学びを活かしていく決心ができた2日間でした。これを機として、みなさんが持ち帰ったつながりが各地で脈々と広がっていきますように。

TEAM えひめ

- ◆保内児童センター『だんだん』 山崎 帆乃花
- ◆五十崎児童館 土井 夏果
- ◆松山市中央児童センター 宇都宮 美楓
- ◆保内児童センター『だんだん』 吉川 芳恵
- ◆保内児童センター『だんだん』 大森 まゆみ
- ◆西予市コスモス館 奥野 柳之介
- ◆大洲市徳森児童センター 菊地 瞳
- ◆大洲市喜多児童館 村上 宏子
- ◆大洲市大洲児童館 新田 美穂

- ◆御荘夢創造館 小山 智美
- ◆宇和島市立児童館こもりん 武田 和華
- ◆松山市中央児童センター 石田 芽生
- ◆西予市コスモス館 宇都宮 美由
- ◆大洲市徳森児童センター 横山 典子
- ◆八幡浜児童センター 山下 知枝
- ◆大洲市大洲児童館 宇都宮 裕美
- ◆大洲市喜多児童館 柏木 真紀

(参加者数: 15日/16名 16日/16名)



第3分科会 【減災・防災】

『自分を守る 人も守る みんなで生きる』 ～減災から防災へ～

いつ起こるかわからない災害に向けて、防災・減災の基礎、基本となる正しい考え方を身につけましょう。こどものあそびや居場所を取り戻すため、児童館としてできる支援は何かを一緒に考えてみましょう。

【1日目】

1 スピーチ 江夏 猛史 氏(NPO法人減災教育普及協会 理事長)

「自分を守る 人も守る みんなで生きる ～減災の気づきがこれまでの防災を変える～」

日本の防災教育の問題は、こどもに防災教育をしている先生が正しい防災教育を習う機会がないまま、周囲からは“先生は正しい答えを知っている”と見られていて、今までの慣例で指導していることが多い点です。

災害が突発的に起こるのは誰もが理解していますが、では避難訓練はどうでしょう。事前に予告してから行いますよね。そういった部分をもっと考えていかねばなりません。避難訓練を「指示型」から「思考型」へアップデートしていく必要があると考えています。また、訓練に対する評価は「早く避難できた」というスピード重視。でも、これからは、こどもが間違わない・迷わないよう、よく考える練習ができる訓練が必要なんです。



【地震に対する減災対策】

- ① 自治体の地域防災計画などから予想される地震を知る
- ② 自分たちがいる建物の耐震性能などについて確認する
- ③ 上記の①・②を踏まえて被害を予測する
- ④ 予測した被害に合わせた動きを考える

江夏氏は、地震に対する減災対策として上記の①～④のステップを紹介。「誤った防災教育でこどもの生きる力や生き残る可能性を決して奪ってはならないと」述べられました。

2 地震に備える 「地震の揺れのシミュレーション」

実際に地震が起きたときの揺れはどのくらい——？

専用のマットを使い、地震時の揺れを体験しました。

これまで主流だったのは、体を縮めて頭を両手で守る『ダンゴムシのポーズ』。でも、いざ試してみると、激しい揺れのなかでは安定した姿勢をとるのが難しく、周囲の状況確認やその場から離れることができません。

そこで教わったのが『カエルのポーズ』。ひざをつき、足を広げるとともに、おしりを低くした姿勢をとります。また、腹ばいになる『トカゲのポーズ』も有効です。これらのポーズをとれば、周囲の状況確認や揺れへの耐性が前者と比較して少し簡単になりました。

ここでは、各自が児童館・児童クラブの一室などをイメージしてシミュレーションを行います。もし、目の前にこどもがいる状況で同じ揺れが起こったら…。想像するに易く、その誰もが「自分を守るのにただ精一杯」になると思います。

ガラスが飛散する窓際、天井パネルが降ってくる遊戯室。果たして私たち大人だけが、施設内の危険が少ない場所を知っていればそれでいいのでしょうか。こどもを巻き込んだ意識づけの重要性を学びました。



【2日目】

3 グループディスカッション① 「地震発生！この児童館は大丈夫なのか？」

愛媛県西条市の児童館をモデルとして、児童館の平面図や周辺情報、市作成の防災マップなどを活用し、可能な限り得られた情報からどの程度の被害が想定され、またどうすれば被害を最小限にとどめることができるのかを考えました。想定される被害を模造紙に並べ、付せんを用いてリスク大きき順に整理します。

最大のリスクを死亡とし、重症、中等症、軽傷の順で、被害とリスクに対して優先順位をつけて分類しました。被害状況の想定では、天井の崩落やガラスの飛散などの建造物の崩壊・崩落などの被害が挙げられていました。



4 グループディスカッション② 「被災後の児童館・児童クラブを考えてみよう」



もし被災したら、①何をする？何ができる？、②問題点は何か？、③誰に声をかける？という3つのポイントに絞り意見を出し合います。有事の際は、各施設に完備されている防災マニュアルなどの手順に沿った適切かつ迅速な対応が求められますが、ここに出てきた重要なキーワードは「つながり」。日ごろから、地域や社会資源とつながっておくことの重要性について、改めて気づくことができました。

また、本分科会の参加者には、実際に大きな地震を経験した方もいらっしゃり、「児童館で被災者を受け入れ、半年後に児童館を再開した」という貴重な話もお伺いすることができました。

5 まとめ

「街は被災しても時間をかけて復興する。人は元には戻らない。死んではいけない。」普段からの備えの重要性を江夏氏に教えていただきました。

地震災害のひとつをとっても、立地場所や建物構造によって被害想定は千差万別です。本分科会で学んだ内容をベースに、明日からは「自らの児童館・児童クラブの場合なら？」とオーダーメイド的に落とし込み、実践していくことが大切です。

そこで忘れてはならないのは、こどもを巻き込んだ減災対策。私たちは、自治体が啓発している防災情報を整理しながら、目の前のこどもと一緒に減災対策を考え、講じていくことができます。本分科会で出会えた仲間とともに、こども参画型の防災計画や避難訓練になるよう取り組んでいきたいと思います。

6 担当者より

「私たちが今まで行っていた避難訓練は何だったのか」と衝撃を受けた方が多かったのではないのでしょうか。また、ご自身の児童館・児童クラブが所在する自治体から発信されている情報をもとに、地域特性や施設規模、時代に応じた防災計画にアップデートしていかなければと感じた機会になったと思います。

TEAM えひめ

◆西条西部児童館 秋山いずみ
◆新居浜市立川東児童センター 横林 秀明
◆今治市朝倉児童館 森田 延子
◆新居浜市立中央児童センター 馬場 綾実
◆西条児童館 永井 明美
◆東予西児童館 日和佐 美智子
◆新居浜市立中央児童センター 日野 瑛莉奈
◆新居浜市立上部児童センター 日笠 光
◆東予西児童館 近藤 雅子

◆今治市伯方児童館 松本 弘美
◆新居浜市立川東児童センター 久瀬 奈緒美
◆今治市本町児童館 原田 尚美
◆新居浜市立上部児童センター 宮崎 舞
◆丹原児童館 渡部 香里
◆新居浜市立瀬戸児童館 青野 文
◆西条児童館 萩原 ひなの
◆丹原児童館 近藤 玲子
◆新居浜市立瀬戸児童館 藤田 恭子

(参加者数：15日/34名 16日/31名)



第4分科会 【スキルアップ】

『あそびのアンテナを磨こう』～あそびってなんだ？そのあそび光ってる？～

児童館や放課後児童クラブで日々提供している「あそび」。それは、こどもにとってどのようなものでしょう？また、支援する我々にとってはどのようなものでしょう？あそびを通したこどもの姿から、「あそびってなんだ？」を考えてみよう！

1 概要 「キーワードは、“じゃない場面”と“じゃないおもちゃ”!？」

本分科会の出発点は、「児童館や放課後児童クラブでの日々のあそびが、こどもにとってどのような意味を持ち、支援者にはどのような視点が求められるのか」ということでした。こどもはあそびのなかで学び成長し、世界を広げています。しかし、そのあそびが活きるかどうかは、支援者の視点次第。

そこで、参加者が自身の固定観念を見つめ直すことを狙い、支援者にとっての“じゃない場面”と“じゃないおもちゃ”を切り口に、場面ごとでの支援者の関わり方とモノがもつあそびの価値を探求する2日間としました。

初日は“じゃない場面”、2日目は“じゃないおもちゃ”についてです。話し合っ、こども心を磨きましょう！

当日までの宿題	① 現場で自分がいいな・好きだなと思うこどもたちの様子(写真) ② うちの子たち、こんなものでもあそんでますの写真 or モノ
当日の約束	① 正解・間違いはない。自分の考えをためらわずに。 ② 児童館のルールはお休み。「じぶんだったら？」で OK！ ③ いろんな考えを聞きたい！だから、人の考え方を否定しない。

【1日目】

2 グループワーク① 「みんなの好きなこどもの姿と、とある施設の”じゃない場面”」

宝石のかけらを組み合わせてチーム名を読み取るあそびからスタート。アイスブレイクでは、自己紹介を兼ねて宿題①を発表します。こどもたちの素敵な様子に共感しながら、お互いの施設やその様子を褒め合い、各グループがさっそく盛り上がります。



グループワークに入る前、みなさんに一つの似顔絵を見せました。こどもがピンクの色鉛筆で描いたその絵が、男性職員の顔だと思った人は何人いたでしょうか。これが大人の固定観念です。

改めて“じゃない場面”を考えるグループワーク、『これ！なに、なに？』。小型児童館でのこどもたちの驚くべきあそび。もしあなたが見かけたら、何と声をかけますか？



床に、おととと(菓子)を並べるこどもたち、花を摘んできてはテープで貼り付けるこどもたち、側溝カバーを小手にして砂あそびに興じるこどもたち…。現場さながらに10秒(!?)で声かけを考えて発表し合います。「えーっと…、ど、どう声をかければ…」戸惑いの声上がるなか、「現場ではもっと短い時間で判断してるよ！」とのアドバイスが飛び交います。

その声かけを書いた付せんを皮切りに、「そのときに頭にめぐるさまざまな思い・それぞれの発表からの気づき」とワークを展開。単なる注意なら自然と思いつくお題を前に、こどもの発想を褒めようとしたり、大人として何かを伝えようとしたり。目の前のこどもの姿をいかに否定しないか、懸命に考えるみなさんがとても印象的でした。

【2日目】

3 グループワーク②

「みんなの施設の“じゃないおもちゃ”と、振り返りのキャンプファイヤー」

2日目の朝、「もっと、こどもの視点に立ってみましょう」と全体に伝えました。そして始まったグループワーク、『あそびのバイキング』。宿題②を通して、本来の使い方“じゃない”あそびを紹介し合いました。

それは、こどもにとって何度もあそびたくなる最高のおもちゃ。これは、こどもの発想の体験会です。企画側が記録を行い、みなさんには「新しいあそびに誘うこども・あそびに誘われたこども」になりきって、そのあそびを膨らませることに徹してもらいました。

プラ板をコレクションしたり、ぶつけ合ったりして遊ぶ!?、ビー玉転がしのレールを積み上げたり、カプラでジェンガするのが大好き!?、サーモグラフィや街中のシーサーがおもちゃに!?、工作用の段ボール箱にそのまま入っちゃう!?…。

こどもの発想を前に「あるある!」、「こんなこともしたくなるよね!」と話が弾みます。少人数のときだけシャボン玉鉄砲であそんでいるけど、大勢でもあそべるかな?、鉄棒をサッカーゴールにしているけど…他にいい方法あるかな?といった相談もありました。



楽しい時間も束の間、あっという間に2日目が終わりました。こどものあそびに向き合う私たちの課題は一人ひとり違います。一般論ではなく、全員の気づきの共有で分科会を終えました。キャンプファイヤーさながらに、円座になって振り返ります。

「10秒の短さには焦ったが、実際にこどもと関わるときの声掛けはもっと短いと気づいた」、「自分の声掛けがどう受け止められるか、フィードバックをもらうことで自己肯定感が上がり、新たな視点も得られた」、「この見方がすごい!と意見を交わすのが楽しかった」、「あそびの可能性が広がった」、「こどもがあそびをどのように編み出すのかを改めて考えさせられた」、「こどもがあそびを生み出す力をもっと信じるのが大事だと実感した」など、さまざまな意見や感想をいただきました。

4 担当者より

“じゃない”というキーワードは、必ずしも話しやすい内容ではなかったように思います。それでも2日間を通して、みなさんの表情はほぐれ、輝いていきました。想定を超えるほどの盛り上がりを見せたグループワーク。考え方のレールをほとんど敷かずとも、最後の振り返りではみなさんが意図をくみ、それが学びになったと言ってくれました。

くしくも、ゲストトークのキーワード「主体性」を参加者のみなさんが体現し、一人ひとりが輝く分科会となりました。

分科会運営をサポートしてくれた大学生ボランティアのみなさまにお礼を申し上げます。必要な仕事を自ら見つけ、自ら学ぶ姿はとても頼もしかったです。会場を通り道にくださったみなさま、よい雰囲気づくりの一助となりました。ありがとうございました。また、そのような部屋を私たちにご用意くださった事務局みなさまにも大変感謝しています。

施設に帰ったみなさんの目に、こどもたちの“じゃない”あそびが輝いて見えていますように。



全児研 TEAM GENSEKI

- ◆まきば児童センター 園部 信大
- ◆さぬきこどもの国 尾松 佳織
- ◆宮古島市ひらら児童館 新城 宗史

- ◆愛知県児童総合センター 阪野 大介
- ◆京都市桂徳児童館 山口 直人
- ◆えひめこどもの城 上木 秀美

(参加者数: 15日/17名 16日/17名)



第5分科会

【あそびの重要性・こどもの声を聴く】

『あそびで育つ！こどもの声の活かし方』 ～悩みのツボは宝物！？～

こどもたちの「やりたい」を叶えるために、「あそびとは何か？」の原点に立ち返り、持ち寄ったこどもたちの声をもとにディスカッションしませんか？こどもの声や気持ちにどう寄り添い、どう向き合い、あそびにどう反映していくのか、そのヒントを探ります。

【1日目】

1 アイスブレイク



グループ内のコミュニケーションを円滑にするためのアイスブレイク、「全国大会言葉探し」。ルールはとても簡単で、えひめ大会から連想する単語を1分以内にとにかくたくさん書くというもの。始まると同時に、みかん・じゃこ天・タルトなどの愛媛の名産をはじめ、こどもまんなか・つながりなどの言葉が次々に飛び出し大盛り上がり。寒かった部屋も一気に熱くなりました。

連想した言葉が一番多かったグループには、長野県松本市の銘菓「若がえる饅頭」がプレゼントされました。

2 あそびの重要性について

グループワークに入る前、高阪 麻子氏（愛知県東郷町立兵庫児童館館長）から、「あそびの重要性について」助言をいただきました。

こどもにはこどもの世界観があって、それが児童館・児童クラブにはある。こどもにとって、あそびとは「ごはん」。あそびには、挑戦して失敗する、何度もやり直す、けんかして仲直りして、また挑戦する力を持っている。

こどもがやりたいくてやったものはあそびで、「やりなさい」と言われたら、それはあそびではなくなってしまう。

あそびは、何度も作り上げては壊していく。ときにはケガをすることもあるけれど、次は気をつけて挑戦するのがあそび。やりとげた達成感、誰かに応援されてもう一度挑戦する、がんばって乗り越えたあとに得るものがある。こどもは、そういったことをあそびのなかで経験していく。だから、あそびには自由が保障されないといけない。

その「自由の保障」には、こどもの声を聴くことが何よりも大事。聴くための環境、聴くまでの人間関係があってはじめて、こどもたちの声がきこえてきます。



3 グループワーク① 「あそびの重要性についての振り返り」

あそびの重要性について再認識・確認したことや所感を付せんしに書き、各グループで自己紹介をしながら模造紙に整理しました。こどものあそびは、主体性・コミュニケーション力・生きる力を養う、エネルギー、成長、やすらぎなどのキーワードが出たほか、こどもを支える側の視点として、寄り添う、プロセスを認める、こどもの気持ちを大切にすることなどの児童館・児童クラブ職員らしいキーワードも出ました。

【事前アンケートの集計・分析結果の報告】

「こどもの声を活かすあそびや取組での悩みや困りごと」という質問では、こどもの声に関することが約半数(約41%)を占め、声をどのように反映していくのか悩まれていたり、実践の難しさを感じていたりしていることが分かりました。

4 グループワーク② 「悩みの共有(悩みのツボ(壺)づくり)」

参加者が抱える悩みや課題を付せんに書き、意見交換を行いました。主に挙げられた悩みや課題としては、

- ・ こどもの声を活動にどう反映していくのか
(こどもの声に関すること)
- ・ 職員によって対応が違う
(職員のこどもとの関わり方やスキルに関すること)
- ・ 児童館に〇〇を作してほしい
(施設的环境整備や予算に関すること)

各自の付せんはカプセルに入れて壺に投入。みなさんの「困った」が詰まった、悩みのツボが完成しました。



【2日目】

5 グループワーク③・グループ発表



悩みのツボからカプセルを取り出し、その悩みに対しての意見を出し合い、模造紙にまとめました。一体、どんな悩みが出てくるのか…ハラハラ、ドキドキ。

「マイナスをマイナスにとらえずプラスに変える」、「ちゃんと見ているよ、ちゃんと聴いているよというメッセージをきちんと伝えたら」、「ひま〜！と言うこどもがいたら、ひまじんクラブを作っちゃう！」、「小まめなミーティングで職員同士の情報共有が必要」など、さまざまな視点や角度から「困った」に対するアイデアが出されました。

最後は、悩みのツボからたどり着いたキーワード『宝』を全体で共有しました。

6 参加者の声

- ・ こどもの声を大切にするためのさまざまな方法や見方、職員のつながりという『宝』が見つかりました。
- ・ 「あなたの声を聴いているよ」ということをこどもに分かりやすく伝えたい。では、それを伝えるためには、どんなアクションをしていけばいいのか。これからもみんなで一緒に『宝』を考えていきたい。
- ・ みなさんの情熱！温かい眼差しと優しさ。出会い、共感、すべてが『宝』となりました！

7 担当者より

両日を通して、あそびの重要性について改めて学びを深められたとともに、専門性が問われる児童厚生員・放課後児童支援員として、「こどもの声を聴く」にあたっての悩みや思いが共有できました。

今日・明日でその答えは出なくとも、みなさんと一緒に「困った」を詳しく掘り下げて意見交換を行えたことで、たくさんの『宝』があることに気づき、また解決のためのヒントや糸口を見出すことができました。そして何より、「また明日からがんばろう！」とエネルギーのチャージができました。みなさんとの出会いも全て含めて、そのすべてが『宝』です。

この宝を、全国の児童館・児童クラブで働く仲間と共有し、こどもの声や気持ちが反映されたあそびや活動を実践していきましょう！



全児研 TEAM 宝

- ◆愛知県東郷町立兵庫児童館 高阪 麻子
- ◆金沢市立扇台児童館 宮崎 恭子
- ◆越前町朝日児童センター 忌部 智子

- ◆福井県児童科学館(エンゼルランドふくい) 村田 弘孝
- ◆松本市明善児童センター 設楽 秀子
- ◆福井県児童科学館(エンゼルランドふくい) 村瀬 次郎

(参加者数: 15日/25名 16日/24名)



第6分科会 【中・高校生世代】

『中・高校生世代との関係性づくりは、むずかしい？ニガテ？？ 楽しい？？？』 ～「こどもの権利」を大事にすると、利用促進される？！～

「こどもの居場所づくりに関する指針」にも「こどもの声を聴き、こどもの視点に立ち、こどもとともにつくる居場所」の重要性が語られています。すべてのこどもを対象としているユニバーサルサービスとして、こどもの権利を柱に児童館における中・高校生世代の関わり方を通して、利用促進について考えます。

1 グループワークの進め方について 「みんなで一緒に育てる『種まきノート』の活用」



本分科会では、中・高校生世代(以下、「中高生」)の声を聴き、ともに居場所を作り上げるためのヒントをお土産として持ち帰れるよう、卒業アルバムの寄せ書きをコンセプトにした『種まきノート』を作成していくことにしました。

このノートは、「中高生に対応した時のしくじり」や「中高生の気持ちをカタチにするために大切なこと」などを書き留めて作り上げていきます。また、自分のメモだけでなく、同じグループの仲間からの共感や悩み、アドバイスなどを記入したシールを貼ってもらうことで、その人だけのオリジナルノートになります。

【1日目】

2 事例発表

瀬戸 理音氏(ワーカーズコープ・センター事業団「みんなのBASE」)に、宮城県仙台市の「中高生世代の実態調査に関するアンケート調査」と「仙台市の課題」、それを踏まえて行なったワークショップについて紹介していただきました。

アンケート調査(113館中65館回答)では、自由来館者は全体の5%(残りの95%は児童クラブ)で、そのうち中高生の利用は約5%と少ないことが判明。また、各館における中高生向けの取組では、専用スペースの設置が多いことや、職員の課題感として、時間設定・人員・アクセスといった物理的な要因、他年代との共存が上位を占めていることなどが分かりました。

仙台市の課題としては、中高生からのニーズ把握の難しさ、児童館同士の情報共有不足、ジェンダーやヤングケアラー問題に関する研修機会の少なさなどが挙げられました。また同市は、令和11年までに中高生の自由来館者数を約2倍に増やす目標を掲げており、その達成に向けた対策も求められているそうです。

以上の点などを踏まえ、12月には3か所の児童館長・主任とカタリバのメンバーが集まり、中高生の利用促進を願うワークショップを2回開催。1回目は課題や成功事例を共有し、こどもの声の反映、職員の意識改革、地域との連携強化について議論し、具体的なアクションを開始。2回目は実施した取組の共有、市への提案や地域に向けた発信に話を進展させることができたと言われました。

3 グループワーク① 「中高生に対応した時のしくじり」



このワークでは「中高生に対応した時のしくじり」を発表しました。

しくじりにはさまざまなエピソードがあり、「中高生向けのイベントを行なったが誰も来なかった」、「久しぶりに会った高校生に大きくなったねと言ったら、それはセクハラだと言われた」、「ルールを守れなかったので厳しく注意したら、嫌われてしまった」などが挙げられました。

また、小学生とのトラブルやSNSの問題、閉館後も帰らない、アルコール類の持ち込みなどの困りごととも共有されました。それらのしくじりから学べたことやアドバイスを受けて気がついたこと、他の児童館での取組事例など、活発な意見交換を行いました。

【2日目】

4 グループワーク② 「中高生の気持ちをカタチにするために大切なこと」



前日の振り返りの後、「今回の分科会で自分が持ち帰りたいもの」について個人ワークを行い、自分の目標を明確にしました。

そして本題のグループワークへ。各グループでは、こどもの権利を柱に、こどもの声を聴くこと、一人ひとりを尊重した距離感の重要性、居場所としてのあり方などの意見を交換しました。

例として、名前の呼び方に焦点を当て、「平等性や特別感を考慮しつつも、中高生との関係構築には本人が望む呼び方と乖離が出ないことも大切」といった話で盛り上がっていたグループや、「大人の楽しむ姿がこどもの成長にとって良い影響を与える」、「中高生の居場所の重要性がまだ十分に発信されていない点が課題」などを話題にしていたグループもありました。

それらの意見から自分が考えたことや、仲間からの声(シール)をまとめることで、一人ひとりがオリジナルの『種まきノート』を完成させました。

5 まとめ

本分科会では、中高生の来館促進や環境設定の難しさ、異年齢交流の課題、対話の方法などトークテーマが多岐にわたりました。グループの進行も、ひとつのテーマをじっくりと深めるところもあれば、たくさんのテーマを話し合うところなど、それぞれに特色が表れていたように感じます。

各グループが全く異なる展開で進めていたにも関わらず、最終の共有では一同が共感する内容ばかりだったと思います。中高生のアプローチ方法は多様でも、みなさんの思いは一つであると実感できた瞬間でした。

『種まきノート』と一緒に完成させたメンバーは、これから先にもつながる良い関係性を築き上げることができたと思います。



6 担当者より



本分科会で得た学びを実践につないでいくことで、参加者のみなさんが中高生の気持ちをカタチにしていけると思えました。これも大会関係者のみなさんのご尽力、参加者のみなさんの熱意、そして、本分科会企画委員・アベンジャーズのメンバーが参加者一人ひとりに「一つでも多くの学びとお土産を持ち帰ってもらいたい！」という思いが、この結果につながったのではと感じています。本当にありがとうございました。

私自身、この分科会での出会いを忘れずに、これからも全国のみなさんと一緒に、こどもの声を聴くこと、こどもの気持ちをカタチにしていけることを実践していきます。

全児研 TEAM アベンジャーズ

- ◆八王子市川口子ども・若者育成支援センター 井垣 利朗
- ◆NPOカタリバ b-lab/アダチベース 佐渡 加奈子
- ◆ワーカーズコープ・センター事業団「みんなのBASE」 瀬戸 理音

- ◆目黒区平町児童館 志田 拓人
- ◆町田市役所児童青少年課 水上 陸
- ◆目黒区碑住区センター児童館 水野 かおり

(参加者数: 15日/20名 16日/21名)



第7分科会

【課題解決】

『こんなことできちゃうよ発表会』 ○○したら、こんなことできちゃった！ ～事例からイトコどりしよう！～

「時間ない」、「予算ない」、「マンパワー足りない」などの悩みや弱みを強みに変える『こんなことできちゃうよ発表会』を開催！

「職員の時間なくて、置いとくだけに特化したら家族が平和になった」、「高齢化がすすむ地域でこどもが○○とつながった」など、事例を聴いて深めてイトコどり。やる気と元気を持って帰ろう！

【1日目】

1 事例発表 「こんなことできちゃった」



TEAM神戸から、4つの「こんなことできちゃった」の事例紹介と、「おなやみや課題(凹/弱み)」を「強み(凸)」に変えた実践の発表がありました。

- | | | |
|-------------|----------|---------|
| ① 予算ない事例 | (たかとり児童館 | 水野 宏明氏) |
| ② こどもいない事例 | (神陵台児童館 | 樋口 勲氏) |
| ③ スタッフいない事例 | (六甲道児童館 | 金坂 尚人氏) |
| ④ 経験値少ない | (こべっこランド | 上田 沙和氏) |

参加者は、それぞれがもつ児童館・児童クラブの悩みや課題を考えながら、事例発表を集中して聞いていました。

2 凸凹ワークシート記入

参加者の児童館・児童クラブの「おなやみ(凹/弱み)」と「いいところ(凸/強み)」を考え、各自でオリジナルシートに書き込んでいきます。主には凹について書き出してもらい、凸は現在あるものや、あるかもしれないこと、あったらいいなについて列挙します。

そうすることで、自分が凸凹のどこに着目して仕事をしているのか、どんなことで悩んでいるのかを再確認できる機会となりました。

3 グループディスカッション

①～④の各テーマのおなやみや課題(凹)が似た人同士で集まり、複合的な課題やどれにも当てはまらない人は、「⑤その他」として5つのグループを作りました。

グループのメンバーは、一つの児童館の職員であるという「おなやみ児童館」という仮想児童館をつくり、どんなことで困っているかなどを話し合いシートに落とし込みます。

凹の共有は「自分だけの困りごとではない」ということが分かり、仲間意識がさらに高まりました。

■「おなやみ」さがし
課題を考えて、箇条書きにしてみましょう。

1番の課題は

・

・

・

・

・

■「いいところ」さがし
地域の強み、施設の強みはなんですか？周りの人と話し合ってみて見えていなかった点も追加していきましょう

「おなやみ児童館」で共有された凹]

- ・ 乳幼児の利用が少ない(こども園にすぐ入ってしまう)
- ・ 異年齢であそべるメニューがあまりない
- ・ 経験者やスキル、元気でやる気のある人がいない
- ・ 職員間で意識をすり合わせる時間がない、こどもリーダーの育成
- ・ もっと職員は欲しいが、誰でもよい訳ではない・トラブル対応に追われ、さらに不足する

【2日目】

4 おなやみのお手紙交換

自分と同じようなおなやみを持つグループメンバーで話し合うと、整理ができず煮詰まってしまうこともあるので、別のグループに「おなやみ児童館」シートを渡す、お手紙交換をしました。

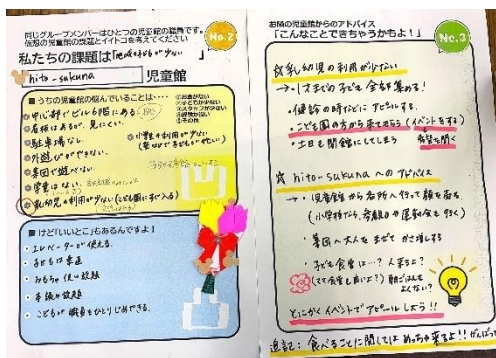
別テーマのグループに行き質問をする人、グループに残って質問に答える人に分かれ、それぞれがインタビューをしながらどのようなことに困っているのかを話し合いました。そうすることで、多くの児童館や児童クラブでずっと課題となっていることや共感できることが抽出できました。

正規職員が畑違いで仕事を理解していないおなやみに対しては、「下の人が育ててあげればいいんじゃないの?」、「下の人が上を育てよう!」というアドバイス、(自治体の)課長が分かってないから、事業もなかなか実現しないというおなやみには、「行政を招き入れ、明確に予算がないことを伝えて予算取りをしたらどうだろう?」といった提案が挙がります。

また、職員間の意思疎通が少なく困っているおなやみには、「毎日5分でもミーティングをすればいいんじゃないかな?」、「少なくとも1週間に1回、1か月に1回はミーティングをすればいいんじゃないかな」、「時間休を取ってランチ会や夜の飲みニケーションをすればどうかな。早く帰りたい人は無理に参加するのではなくてね」など、さまざまな意見が出ました。



5 グループ発表 「こんなことできちゃうよ発表会」



「おなやみ児童館」シートで話し合った内容をまとめ、各グループで凸(強み)を増やし、お隣の児童館からのアドバイスとして、「こんなことできちゃうかもよ!」を代表者が発表しました。

例えば、「乳幼児の利用が少ない(こども園にすぐ入ってしまう)」の凹には、「希望を聞いてイベントを行い、こども園の方から(まとめて)来てもらう・健診の時などにアピールする」といった凸になるアドバイスが複数のグループから出されました。

一見すると凹のようでも、見方を変えたと凸に変換できることが分かり、「あっ、そっか。なるほど! そういう考えがあったか」と言葉に出してうなずく参加者。発表の度に笑いや拍手が起こりました。

6 やっちゃうよ宣言

最後に全員が、今日から明日から「こんなことやっちゃうよ・できちゃうよ!」をカラー用紙に書き、『やっちゃうよ宣言』をグループ内で発表して、本分科会の幕を閉じました。

なかには、「議員に立候補します!」という宣言が飛び出し、明日の未来の児童館・児童クラブをより良くしてこうという力強い、心強い仲間たちの宣言を聞くことができました。

2日間をやり終えたみなさんの顔は清々しく、力強く、そして、とてもかっこよく見えました。



全児研 TEAM KOBE

- ◆神戸市立児童センターこべっこランド 大角 玲子
- ◆神戸市立児童センターこべっこランド 岡田 純子
- ◆神陵台児童館 樋口 勲
- ◆頌栄児童館 岡部 裕子

- ◆鹿の子台児童館 飯田 剛治
- ◆六甲道児童館 金坂 尚人
- ◆たかとり児童館 水野 宏明
- ◆神戸市立児童センターこべっこランド 上田 沙和

(参加者数: 15日/31名 16日/31名)



第8分科会 【こどもの権利】

『こどもの参加から参画へ』～だいじょうぶ！じぶんたちできめていいんだよ～

勉強タイムになると脱走しちゃう個性たっぷりの二人組が、みんなの人気者アイドルに大変身♪
信じる・任せる・やってみる。“ミカタ”によって世界がひろがる！こどもと関わる大人が大切にしたいことを一緒に考えましょう。



【アドバイザー】

深作 拓郎 氏(岩手大学 准教授)

「こども×あそび×地域参画」をテーマに研究。

こどもの参画のベースにある「こどもの自己決定・自己実現」は、こども同士、こどもたちと児童厚生員との日々の関わり合いが重要と考えています。



【アドバイザー】

大久保 さくら 氏(中標津西児童館 児童厚生員/児童健全育成指導士)

北海道東部にある児童館に勤務。

児童厚生員として20年。こどもと関わるなかで、「こどもたちがありのままの姿でいられる居場所」としての役割をどう担っていけるのかを日々熟考しています。

【1日目】

1 キーノートスピーチ

笠原 素子 氏(札幌市二条はるにれ児童会館 館長)

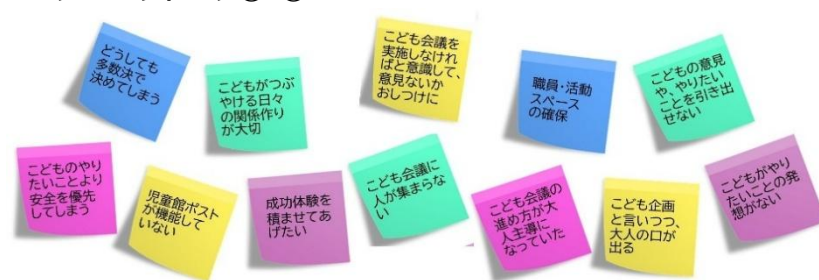
「勉強タイムになると脱走しちゃう個性たっぷりの二人組が、みんなの人気者アイドルに大変身♪」

勉強タイムなどの集団行動や決まったプログラムへの参加が苦手な小学1年生の2人。「プレイキンが踊れるらしい」という周りの声から、踊りたいとつぶやいた2人に対し、職員が「踊る？」と声をかけたことから始まったアイドル活動。

周囲のこどもたちも活動を応援するようになり、参画の輪が広がります。大人が見方を変えたことで、こどもたちが成長し、周囲に変化をもたらしたアイドル誕生の事例を紹介しました。



2 グループトーク①・②



各グループで自己紹介をした後、前半(グループトーク①)では、キーノートスピーチの感想を共有。「型にはめず、こどもに聴くことが大切」、「こどもがつぶやける日常の関係づくりが大切」などの声が挙がりました。

後半(グループトーク②)は、児童館・児童クラブでの取組や、こどもと

関わるなかでの困りごとをテーマに意見交換を行いました。具体的な取組では、「こどもが自分でおやつを注文する」、「プログラムやルール決める」などの事例を紹介し合い、明日からの実践に役立つヒントが得られました。他方で、「自由来館の特性上、こどもの意見の聴き方と取り入れ方が難しい」、「こども企画と言いつつ、大人発信になっているのでは？」といった意見もありました。

参加者は施設規模や立場での違いを感じながら、「大人の押し付けになってしまっていたのでは？」というキーワードを得て、初日を終えました。

【2日目】

3 グループトーク③

「大人の押し付けになっていたこども会議」

交流会も経て、和らいだ雰囲気です。2日目。前日のキーワード「大人の押し付けになってしまっていたのでは？」の根幹にあるモヤモヤについて、児童館でのこども会議を事例にスタートします。

どうしても多数決になってしまう、成功体験を積ませてあげたいなどの大人の共通した思いを確認しながら、どうしたら本当の意味でのこどもの参画を実現できるのかを話し合いました。

1日目のキーノートスピーチは、大人が見方を変えることでアイドルが誕生したという部分が印象的だったかと思います。しかし、「こどもとの日常的な関わりのなかで、その気持ちや思いに寄り添い、新たな発想を見逃さなかったこと」を補足し、その後のグループトークに活かします。

「声になっていない(隠れている)思いに気づき、それを受け止める感覚を身に付けたい」、「こどもの声を肯定的に聴きたい」などの話で盛り上がり、ここでの締めくくりとして、こどもの思いや本音の部分を見逃さないことが重要で、そこから得られる信頼関係こそが自由に意見を言い合える土壌になると気づくことができました。

大人の『ミカタ』を変えたら…



4 まとめ



児童館・児童クラブで働く方はもちろん、NPO団体の代表や大学院生、議員などさまざまな方にご参加いただいた本分科会。

「その発想、おもしろい！実現するためには〇〇の課題があるけれど、どうやったらクリアできるだろう」、「実現に向かうには、肯定しながら一緒に考えることから始めるのでは？」など、多くの意見を共有することができました。

アドバイザーの深作氏は、ふたりのアイドルの話为例に挙げ、「こどもに考える余白がある分、

裁量(自己決定)の度合いが増える」と助言。こどもと私たち大人が一緒に考え合うことの大切さや、トークセッションで岡田氏が述べたERROR&LEARN(エラー・アンド・ラーン/学び続けること)は、まさに児童館・児童クラブに携わる私たちに必要なことだと気づき、明日からの一歩をリフレクションシートに書き留めました。

5 担当者より

本分科会のテーマには、企画運営委員「全児研TEAM 北の国から」の熱い思いが詰まっています。

「だいじょうぶ」の一言にある安心感——。「この一言って、児童館・児童クラブに携わる職員だからこそ言える言葉だね」、「こどもたちのことは、こどもたちが決めるって大事だね」、そのような対話を重ねながら、こどもの参画をどう伝えていこうかを考え準備を進めました。

こどもと関わる大人が大切にしたいことって一体何だろう。大人が視点を変えることで世界は変わります。全国の仲間と語り合ったことで得た学びや気づきは、私たちの未来につながったと確信しています。

アドバイザーの両氏からは、「日ごろから、こどもと一緒に実践していることを自分の言葉で伝えていってほしい」、「児童厚生員の思いはみんな一緒。全国に仲間がいるから、明日からも頑張れると思ってほしい」という熱いメッセージをいただきました。

こどもの参画を一緒に考え合ったメンバーがここでつながり、そして、こどもの生活がさらに豊かになることを願いながら、全国各地で歩み続けたいと思います。また語り合いましょう！

全児研 TEAM 北の国から

- ◆中標津西児童館 大久保 さくら
- ◆札幌市二条はるにれ児童会館 笠原 素子
- ◆札幌市苗穂・本町児童会館 鈴木 清美
- ◆札幌市屯田北児童会館 東 晋次
- ◆(公財)さっぽろ青少年女性活動協会 小森 珠恵

- ◆岩手大学 深作 拓郎
- ◆札幌市あいの里児童会館 上杉 佳子
- ◆札幌市美しが丘児童会館 山田 美奈
- ◆札幌市菊水やよい児童会館 松尾 知実
- ◆(公財)さっぽろ青少年女性活動協会 高橋 雅裕

(参加者数: 15日/25名 16日/25名)



交流会 「話して、食べて、心もお腹也大満足！」



会場に入った途端、『みかんジュースが出る蛇口』を見て、こどものようなキラッキラの笑顔！
一堂に会した全国大会は、2018年以来。

コロナ禍を乗り越えた久々の交流に、高まる気持ちが抑えられない。





『ウクレレうかれ隊』の生演奏、県内各郡市町の名産品が当たる大抽選会也大盛況！



ご参加いただいたみなさん、どうもありがとうございました！



〔全体司会〕 多賀 千晶(松山市北条児童センター)・古澤 智(えひめこどもの城)
〔大抽選会〕 田中 基行(松山市南部児童センター)

(いよてつ高島屋ローズホールにて 参加者数: 15日/245名)



エンディング・閉会式



分科会報告

【第1分科会】 『実演！こども会議』



こどもの声を聴くための手段として注目されている、こども会議——。

本分科会では、日ごろから児童館に来館しているこどもに登壇してもらって、その会議の様子をみなさんに観ていただきました。生の声はとても新鮮で、会場にいた私たちの心に響きました。その一つひとつの声を、大人がどうくみ取り、つなぎ、こどもと一緒に動くか。もしできなかった時は、なぜできなかったかという理由をフィードバックする。そして、どうすればできるかを一緒に考え、動く。

「こどもたちとともに」という『こども参画』の姿勢を胸に、これからは私たち大人は、こどもの声を聴いていきましょう。

【第2分科会】 『中高生もふらっといこうや！』



1日目は、「児童館に中高生が来ない・行かない理由や考えられる原因」を討議し、中高生対象のアンケート調査の結果から、「中高生に児童館を利用してもらうために大事にしたいこと」を各グループで意見を出し合いました。

2日目は、前日に話し合った「大事にしたいこと」をもとに、4つのテーマに分かれ、マトリックス図に集約しながら、各館の取組について理解を深めました。

この2日間で、中高生が来てくれる理想の児童館により近づけるために、私たちができることを見つけられたように思います。

【第3分科会】 『自分を守る 人も守る みんなで生きる』



みなさん、この場所はどこが安全か、安全でなければどうするか、日ごろから考えていますか。それは、大人だけでなく、こどもも同じように意識できるよう働きかけることがとても大切です。

本分科会では実際の児童館を例に挙げ、どのような被害が想定され、どうすれば被害を最小限に留めることができるのかをみなさんと一緒に考えました。被災した際のシミュレーションでは、私たちだからこそできるあそびや配慮に関するアプローチを再考し、地域や社会資源との日ごろからの「つながり」について、改めてその重要性に気づくことができました。

【第4分科会】『あそびのアンテナを磨こう』

こどものあそびを大人がどう捉えるかを考えるワークを行いました。1日目は写真を用いて、大人がどのように見守るべきかを話し合い、2日目は児童館でのあそびを紹介し、こどものあそびの姿について意見交換を行いました。

両日を通して、支援者である大人が徐々にこどもの目線に立つプロセスを経て、最後はみなさんが輪になって感想を共有しました。あそびの多様な見方や可能性に気づく場となり、大人の関わり方を深く考える機会となりました。

これこそが、未来への原石だと感じました。



【第5分科会】『あそびで育つ！こどもの声の活かし方』

「こどもにとってあそびとは一体何か？」を再確認したあと、グループワークで『悩みのツボ(壺)』を作りました。

翌日はツボから悩みを取り出し、どのような解決方法があるのか、どのようなアプローチをすると解決につながるかなどの意見を模造紙にまとめました。実にさまざまな視点から、解決に導くアイデアが出されました。最後にたどり着いたキーワード『宝』をグループごとで発表し、全体共有を行いました。

答えは出なくとも、悩みを語り、掘り下げて意見交換することで、多くの宝が発掘され、解決の糸口をみなさんと一緒に見出すことができました。



【第6分科会】『中・高校生世代との関係性づくりは、むずかしい？ニガテ？？楽しい？？』

中・高校生世代(以下、「中高生」)の利用促進をテーマに、2日間にわたり『種まきノート』を活用しながら議論を深めました。

初日は各自の実践における「しくじり」を共有し学びを得る時間、翌日はこどもの権利や主体性に立ち返り、中高生との関わり方について意見交換を行いました。今回出会えたメンバーは、明日以降もつながったままの良い関係性になれたと思います。今後も各地で実践をつなぎ合わせ、中高生の利用促進に向けてみなさんと一緒に取り組んでいきたいと思います。



【第7分科会】『こんなことできちゃうよ発表会』

お金がない、人がいない、こどもがいない、経験がない…のいないづくしの児童館・児童クラブが集まって、自分の児童館・児童クラブの凸(強み)と凹(弱み)を出しあいました。

架空の児童館をつくりあげ、手を変え、品を変え、人を変え、見方を変え…。凹を凹でなくして「こんなことできちゃうんじゃないの」、「できちゃうよ」、「できちゃった」発表会を行いました。

最後はみんなで、『明日からやっちゃうよ宣言』で締めくくりました。



【第8分科会】『こどもの参加から参画へ』

こどもとの日常的な関わりのなかで、気持ちや思いへの寄り添いを絶えず繰り返していくことで、意見が言える環境が整います。アドバイザー(岩手大学/深作氏・中標津西児童館/大久保氏)の「こどもたちの裁量の余地を増やすことが、やっていいんだ！に変わっていく」という助言に一同が共感しました。

また、ボランティアの大学生から「大人のみなさんがこどものために考えて動いてくれているから、私たちは児童館で楽しく過ごせていたんだと感じた」と嬉しいコメントもいただき、明日からの糧となりました。



全国発議

(全国児童厚生員研究協議会)



私たちは、「こどものために何が最も良いことか」を常に考え、
こどもが健やかで幸せに成長できる
「こどもまんなか社会」を具現化していきます

- ・ こども自身が権利の主体であることを実感できる居場所として取り組むとともに、こどもの権利に関する理解を地域社会に啓発します
- ・ あそびを通じて、こどもとの関係性を構築し、こどもの最善の利益を優先するソーシャルワーカーとして、こどもや子育て家庭が抱える課題解決に向けた対応を展開します
- ・ とともに社会をつくるパートナーとして、こどもの多様なニーズを理解し、新たな居場所づくりのコーディネートをします

全国児童厚生員研究協議会

第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ参加者一同

→ 閉会宣言



第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ企画運営委員会 委員長 ^{やました}山下 ^{よういちろう}洋一郎

『第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ』の閉会にあたり、主催者を代表してひとことご挨拶申し上げます。

「全国大会を開催して、何が残るのか」。2017年2月、愛媛で開催した第15回大会の誘致の際、県児連総会で実際にいただいたご意見です。「何が残るのか」を考えながら、先輩方の背中を夢中で追いかけて、勉強会や意見交換会を積み重ね、迎えた大会の後には、市町や県の境を超えた職員・全国のみなさんとの「つながり」ができました。

あれから8年、みたび「えひめ」で3回目の開催にあたり、前回から引き継がれた「つながり」を基に、全国各地から大勢の皆様にお集まりいただき、開催することができましたこと、厚くお礼申し上げます。

今回の大会テーマ「ふらっと(Flat)いこうや」には、こどもたちが自らの意志で行くことができる児童館だからこそ、気軽に来館してほしいとの想いを込め、8つの分科会を実施しました。

8という数字を90度回転すると、無限(∞)を示す記号に似ています。社会が大きく変わっていくなかで、多様性が主流となった現在、答えが一つという時代は終わりました。「こどもまんなか社会」の実現に向けて、こどもの声を聴くということは、改めて私たち児童館・児童クラブの職員にとって、耳に心地のよい言葉だけではなく、耳の痛い話も聴き、反映し、実現をするために、大人こそ考え方を大きく変えていかなければいけないことを2日間の大会を通じて感じていただけたと思います。

「困難な仕事が人を成長させる」。私が以前参加をした大会の分科会でかけていただいた言葉です。今回の愛媛大会、世代交代という言葉がたくさんいただきました。私は、世代交代ではなく役割交代だと思っています。今大会、初参加のスタッフは良質な体験の場として、経験のあるスタッフは役割を変更した新たな体験の場として、実施をさせていただきました。体験を積み重ねると経験になります。そのバトンは次につなげていかなければなりません。

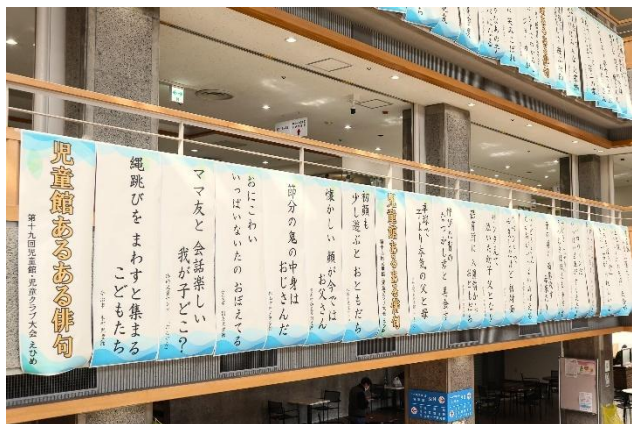
コロナ禍を経て、全国から一堂に参集する形での実施がリ・スタートし、次回は神戸での開催が決定しました。節目の20回大会も、皆様方の熱い想いで盛大に開催され、全国の児童館・児童クラブが益々発展し、全国の仲間たちのつながりが、より広く、より深くなっていくことを祈念いたします。

最後に、大会開催に際しご参加いただいた皆様、ご支援・ご協力をいただいた皆様、そして大会に快く送り出していただき、今日も現場の最前線でこどもたちと向かい合っていたいただいている皆様に感謝の気持ちを伝え、閉会のご挨拶とさせていただきます。皆様、本当にありがとうございました。





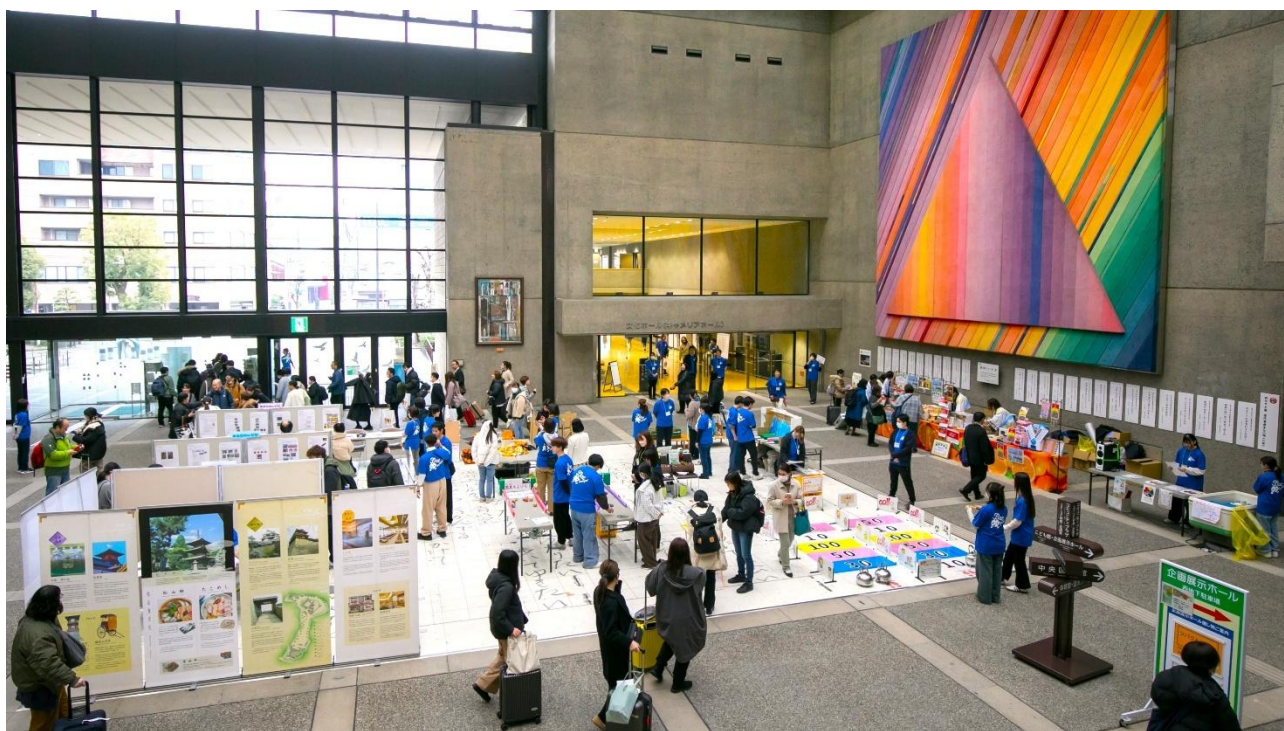
特設コーナー



➡ 「児童館あるある俳句」の展示
県内の児童館から集めた俳句を一斉に展示



➡ 「あそびのレシピ」の掲示
県内の児童館の「あそびのレシピ」が集結



➡ 「あそびのコーナー」 県内の児童館から持ち寄った「てづくりあそび」で楽しもう！

◆ GoGoヤカーリング！

- ー キャスターがついたヤカンでカーリング！

◆ 進め！ビー玉宇宙人！

- ー ビー玉宇宙人を選んでミッションに挑戦！

◆ いよじでつむつむ

- ー みかん？をつむつむ…、いくつ積めるかな？

◆ くつつきあおむし

- ー 竿を使ってたくさんのおおむしを釣ろう！

◆ アニマルハント

- ー ワニワニパニックorもぐらたたきに挑戦！

◆ 俳句コーナー

- ー 「俳句のまち・まつやま」で、誰でもどこでも一句！



オプション視察

えひめこどもの城（大型児童館/愛媛県松山市西野町）

1 施設の概要

次世代を担うこどもたちの健全育成を図るとともに、県下の児童館等児童関連施設の中核的存在として、職員への指導、および要請などの総合的拠点となることを目的に平成10年10月24日に開園。

東京ドーム7個分にも及ぶ広大な敷地には、新設されたアクティビティ「とべもりジップライン」や立体アスレチックの「コシロードベンチャー」、てんとう虫のモノレールやボートなどの遊びのゾーンをはじめ、各種イベント、コーナー体験ができるようになっており、こどものみならず大人（保護者）も一緒になって楽しむことができます。



平成18年4月からは指定管理制度の導入に伴い、現管理者である伊予鉄総合企画株式会社による運営が始まりました。令和6年度の新たな取組として、ARを取り入れた新しい遊び場や関西最大級の光のフェスティバル「フェスタ・ルーチェ」を開催。来園者40万人を目標に、県内外からの利用を受け入れています。

2 視察

園内を周遊するロードトレインに乗って、新しくなったレストラン「アイ・リヴァージュ」に行きました。昼食メニューでは、約8割の方に愛媛の郷土料理の「せんざんき」を味わっていただきました。その後は、えひめこどもの城・とべ動物園を結ぶ四国最大級のジップラインを体験し、自由見学の時間に。

あいあい児童館内の各種体験コーナー（ワークショップ、クッキング）を見てまわり、遊具の体験などを楽しみました。



3 担当者より

オプション視察のご参加ありがとうございました。全国のみなさんとお話ししながら有意義な時間を過ごすことができました。

限られた時間で、施設の全てをお伝えすることはできませんでしたが、えひめこどもの城の特徴や雰囲気を感じていただけたのではないかと思います。

愛媛にお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。



（参加者数：16日/39名）



学生ボランティアスタッフより



本大会では、愛媛県内の3つの児童厚生員養成校などから総勢47名の学生にボランティアスタッフとしてご参加いただきました。この場をお借りし、厚くお礼を申し上げます。

ここでは、大会を終えた後の振り返りとして、学生と先生方からいただいたご感想の一部を紹介します。

【学生より】

- ・ ソーシャルワーク実習では、児童館やこどもの居場所について学ぶ機会がなかったため、こども領域の最新の動向が分かり、視野が広がりました。
- ・ 「こども×福祉」の仕事は未来を感じました。今後も、外に出て学びにいきたいです！
- ・ 今まで児童館を利用する側の立場でした。その裏側で、こうした多くの方々の試行錯誤があつて、私たちの思い出に残る活動を形成してくださっていたんだと実感しました。
- ・ 他大学の学生や現役のスタッフの方々と交流でき、ボランティア活動の良さを改めて感じたとともに達成感を得ることができました。
- ・ 人の喜ぶ顔を見ることは、とてもやりがいのあることだと感じました。このボランティア活動で、周りを見て行動する力と笑顔で対応する力がより一層向上できたと思います。
- ・ こどもが堂々と意見を述べる姿はとても印象に残りました。未来を担うこどもの視野の広さや感受性に触れることができ、非常に有意義な経験でした。

【大学の先生より】

- ・ 大会当日のわずかな時間でしたが、いろいろな形で本学の学生が主催者のみなさんの楽しくて、熱い雰囲気の影響を受けたようです。しきりに、「児童館アツいですね！」と口にしておりました。
- ・ 学生たちは児童館のパワーに感動したようです。外部の方から学生たちの頑張りを伝えていただき、私も学生たちが本来の力を発揮できる社会になるよう、これからも微力ながら頑張っていこう！という気持ちになれました。
- ・ 児童館での就職を強く希望している学生がおりましたので、今回のような貴重な機会をいただきましたこと、本当にありがとうございました。学生も喜び、かなりやる気満々の状態でした。

ご協力いただいた学校・学生のみなさん（順不同/○は児童厚生員養成校）

松山東雲女子大学、○松山東雲短期大学、松山大学、聖カタリナ大学、○聖カタリナ大学短期大学部、○今治明德短期大学（順不同）



メディア掲載【愛媛新聞 2025年2月16日(日)】

「第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ」が15日、松山市湊町7丁目の市総合コミュニティセンターで始まり、全国の児童館や児童クラブの職員ら約300人が子どもの居場所づくりや健全育成に向けた各地の取り組みを共有し、理解を深めている。16日まで。

大会は県児童館連絡協議会や全国児童厚生員研究協議会などの主催で、愛媛では2017年に続き3回目。8つの分科会があり「子どもの声を聴く」「児童館でできる防災・減災」などのテーマで意見交換した。

中学生による児童館利用の促進を考える分科会では、仙台市の担当者が市内の113館に行ったアンケート結果を紹介。利用者は小学生6割に対し中学生は

5%にとどまり「児童クラブのための館になっしまっている」「中高生の志向や趣味に（イベントなどを）合わせるのが難しい」などと課題を共有していた。

開会式では、サッカー元日本代表監督でFC今治高校里山校（今治市）の学園長として教育に携わる岡田武史さんが講演した。岡田さんは、現代は親が子に対して過干渉だと指摘し「親も先生も子どもより先に死ぬ。子が自分で生きていけるようにしないと」と説いた。子に寄り添い、信じて待つことが大切だと呼びかけた。

16日は分科会のまとめ、参加者による「えひめこども之城」（松山市西野町）視察、ジップライン体験を予定する。（小田良輔）

子の健全育成へ意見交換

松山 児童館・クラブ全国大会



中高生の児童館利用について意見を交わす各地の児童館職員ら＝15日午後、松山市湊町7丁目



実行委員会名簿(本委員)

役職	氏名	所属等
実行委員長	敷村 一元	愛媛県児童館連絡協議会会長
実行副委員長	木戸 玲子	全国児童厚生員研究協議会会長
	梅田 広美	全国児童館連絡協議会副会長
実行委員	依田 秀任	一般財団法人児童健全育成推進財団業務執行理事
	芳網 良	一般財団法人児童健全育成推進財団部長
	吉川 芳恵	愛媛県児童館連絡協議会副会長
	上木 秀美	全国児童厚生員研究協議会副会長
監事	斎藤 勇介	全国児童館連絡協議会副会長
アドバイザー	友川 礼	松山東雲女子大学准教授
オブザーバー	阿部 淳子	愛媛県保健福祉部生きがい推進局子育て支援課課長
事務局長	溝田 翔一	愛媛県児童館連絡協議会事務局
事務局	東 美咲	愛媛県児童館連絡協議会事務局



実行委員会名簿(企画運営委員)



役職	氏名	所属等
企画運営委員長	山下 洋一郎	松山市中央児童センター
企画運営副委員長	山本 由香	西予市宇和児童館
	横林 秀明	新居浜市立川東児童センター
全体会部会	○ 白石 美穂子	四国中央市みしま児童センター
	山下 洋一郎	松山市中央児童センター
分科会部会	○ 白川 裕介	東温市よしいのこども館
	山口 淑子	宇和島市立児童館こもりん
	秋山 いずみ	西条市西条西部児童館
	松本 弘美	今治市伯方児童館
	山崎 帆乃花	八幡浜市保内児童センター『だんだん』
	小山 智美	愛南町御荘夢創造館
	横山 典子	大洲市徳森児童センター
	横林 秀明	新居浜市立川東児童センター
運営・企画部会	○ 古澤 智	えひめこどもの城
	山内 はづき	NIKONIKO 館
	水木 美鶴	松前町児童館
	白形 理恵	砥部町麻生児童館
	村上 縁生	伊予市児童センター「みんくる」
交流会・広報部会	○ 山本 由香	西予市宇和児童館
	山本 勝利	内子児童館・五十崎児童館きらり

※上記名簿中の○印は部会長



実行委員会名簿(分科会)

担当	氏名	所属等
第1分科会 「こどもの声を聴く」 (TEAM えひめ)	白川 裕介	(愛媛県) 東温市よしいのこども館
	児玉 愛	(愛媛県) 東温市よしいのこども館
	森田 洋喜	(愛媛県) 松山市畑寺児童館
	久保 舞美	(愛媛県) 松山市久枝児童館
	井上 伊都美	(愛媛県) 松山市久米児童館
	石丸 真理子	(愛媛県) 松山市味生児童館
	山口 寧々香	(愛媛県) 松山市味生児童館
	小野 由美	(愛媛県) 砥部町砥部児童館
	山本 佳子	(愛媛県) 砥部町砥部児童館
第2分科会 「理想の児童館」 (TEAM えひめ)	山崎 帆乃花	(愛媛県) 八幡浜市保内児童センター『だんだん』
	小山 智美	(愛媛県) 愛南町御荘夢創造館
	土井 夏果	(愛媛県) 五十崎児童館
	武田 和華	(愛媛県) 宇和島市立児童館こもりん
	宇都宮 美楓	(愛媛県) 松山市中央児童センター
	石田 芽生	(愛媛県) 松山市中央児童センター
	吉川 芳恵	(愛媛県) 八幡浜市保内児童センター『だんだん』
	宇都宮 美由	(愛媛県) 西予市コスモス館
	大森 まゆみ	(愛媛県) 八幡浜市保内児童センター『だんだん』
	横山 典子	(愛媛県) 大洲市徳森児童センター
	奥野 柳之介	(愛媛県) 西予市コスモス館
	山下 知枝	(愛媛県) 八幡浜市八幡浜児童センター
	菊地 瞳	(愛媛県) 大洲市徳森児童センター
	宇都宮 裕美	(愛媛県) 大洲児童館
	村上 宏子	(愛媛県) 大洲市喜多児童館
	柏木 真紀	(愛媛県) 大洲市喜多児童館
	新田 美穂	(愛媛県) 大洲児童館
第3分科会 「減災・防災」 (TEAM えひめ) [次項に続く]	秋山 いずみ	(愛媛県) 西条市西条西部児童館
	松本 弘美	(愛媛県) 今治市伯方児童館
	横林 秀明	(愛媛県) 新居浜市立川東児童センター
	久瀬 奈緒美	(愛媛県) 新居浜市立川東児童センター



実行委員会名簿(分科会)

担当	氏名	所属等
第3分科会 [前項の続き]	森田 延子 (愛媛県)	今治市朝倉児童館
	原田 尚美 (愛媛県)	今治市本町児童館
	馬場 綾実 (愛媛県)	新居浜市立中央児童センター
	宮崎 舞 (愛媛県)	新居浜市立上部児童センター
	永井 明美 (愛媛県)	西条市西条児童館
	渡部 香里 (愛媛県)	西条市丹原児童館
	日和佐 美智子 (愛媛県)	西条市東予西児童館
	青野 文 (愛媛県)	新居浜市立瀬戸児童館
	日野 瑛莉奈 (愛媛県)	新居浜市立中央児童センター
	荻原 ひなの (愛媛県)	西条市西条児童館
	日笠 光 (愛媛県)	新居浜市立上部児童センター
	近藤 玲子 (愛媛県)	西条市丹原児童館
	近藤 雅子 (愛媛県)	西条市東予西児童館
	藤田 恭子 (愛媛県)	新居浜市立瀬戸児童館
第4分科会 「スキルアップ」 (全児研 TEAM GENSEKI)	園部 信大 (香川県)	まきば児童センター
	阪野 大介 (愛知県)	愛知県児童総合センター
	尾松 佳織 (香川県)	さぬきこどもの国
	山口 直人 (京都府)	京都市桂徳児童館
	新城 宗史 (沖縄県)	宮古島市ひらら児童館
	上木 秀美 (愛媛県)	えひめこどもの城
第5分科会 「あそびの重要性・ こどもの声を聴く」 (全児研 TEAM 宝)	高阪 麻子 (愛知県)	東郷町立兵庫児童館
	村田 弘孝 (福井県)	福井県児童科学館(エンゼルランドふくい)
	宮崎 恭子 (石川県)	金沢市立扇台児童館
	設楽 秀子 (長野県)	松本市明善児童センター
	忌部 智子 (福井県)	越前町朝日児童センター
	村瀬 次郎 (福井県)	福井県児童科学館(エンゼルランドふくい)
第6分科会 「中・高校生世代」 (全児研 TEAM アベンジャーズ) [次項に続く]	井垣 利朗 (東京都)	八王子市川口子ども・若者育成支援センター
	志田 拓人 (東京都)	目黒区平町児童館
	佐渡 加奈子 (東京都)	b-lab/アダチベース
	水上 陸 (東京都)	町田市役所児童青少年課



実行委員会名簿(分科会・運営企画)

担当	氏名	所属等
第6分科会 [前項の続き]	瀬戸 理音 (宮城県)	みんなのBASE
	水野 かおり (東京都)	目黒区碑住区センター児童館
第7分科会 「課題解決」 (全児研 TEAM KOBE)	大角 玲子 (兵庫県)	神戸市立児童センターこべっこランド
	飯田 剛治 (兵庫県)	鹿の子台児童館
	岡田 純子 (兵庫県)	神戸市立児童センターこべっこランド
	金坂 尚人 (兵庫県)	六甲道児童館
	樋口 勲 (兵庫県)	神陵台児童館
	水野 宏明 (兵庫県)	たかとり児童館
	岡部 裕子 (兵庫県)	頌栄児童館
	上田 沙和 (兵庫県)	神戸市立児童センターこべっこランド
第8分科会 「こどもの権利」 (全児研 TEAM 北の国から)	大久保 さくら (北海道)	中標津西児童館
	深作 拓郎 (岩手県)	岩手大学
	笠原 素子 (北海道)	札幌市二条はるにれ児童会館
	上杉 佳子 (北海道)	札幌市あいの里児童会館
	鈴木 清美 (北海道)	札幌市苗穂・本町児童会館
	山田 美奈 (北海道)	札幌市美しが丘児童会館
	東 晋次 (北海道)	札幌市屯田北児童会館
	松尾 知実 (北海道)	札幌市菊水やよい児童会館
	小森 珠恵 (北海道)	(公財)さっぽろ青少年女性活動協会
	高橋 雅裕 (北海道)	(公財)さっぽろ青少年女性活動協会
運営・企画 [次項に続く]	古澤 智 (愛媛県)	えひめこどもの城
	坂田 辰之助 (愛媛県)	えひめこどもの城
	水木 美鶴 (愛媛県)	松前町児童館
	渡部 志保 (愛媛県)	松前町児童館
	住田 清美 (愛媛県)	松前町役場子育て支援課
	山内 はづき (愛媛県)	久万高原町 NIKONIKO 館
	渡部 梨香 (愛媛県)	久万高原町 NIKONIKO 館
	白川 凜太郎 (愛媛県)	久万高原町 NIKONIKO 館
	高田 皓生 (愛媛県)	久万高原町 NIKONIKO 館
	白形 理恵 (愛媛県)	砥部町麻生児童館



実行委員会名簿(運営企画・その他)

担当	氏名	所属等
運営・企画 [前項の続き]	松永 麗奈	(愛媛県) 砥部町麻生児童館
	石丸 陽子	(愛媛県) 東温市よいいのこども館
	大館 麻紀	(愛媛県) 東温市いわがらこども館
	福岡 まどか	(愛媛県) 東温市いわがらこども館
	計良 史織	(愛媛県) 東温市いわがらこども館
	藤田 真弓	(愛媛県) 東温市さくらこども館
	阿立 ももこ	(愛媛県) 東温市さくらこども館
	泉 侑花	(愛媛県) 伊予市児童センター「みんくる」
	中村 竜之亮	(愛媛県) 伊予市児童館「あすなろ」
	田中 基行	(愛媛県) 松山市南部児童センター
総合受付・大会報告書	黒田 泰士	(愛媛県) 松山市北条児童センター
総合受付・交通	梶原 晃美	(愛媛県) 西予市野村児童館
交通	森 政則	(愛媛県) 松山市久枝児童館
ボランティア	柚山 佳子	(愛媛県) 松山市新玉児童館
	壺内 彩加	(愛媛県) 松山市畑寺児童館
交流会・広報	山本 由香	(愛媛県) 西予市宇和児童館
	多賀 千晶	(愛媛県) 松山市北条児童センター
	本川 啓之	(愛媛県) 内子児童館
交流会・広報・全体会	峯下 明香	(愛媛県) 内子児童館
	竹尾 一哉	(愛媛県) 内子児童館
全体会(開会・閉会式等)	白石 美穂子	(愛媛県) 四国中央市みしま児童センター
	近藤 紀子	(愛媛県) 四国中央市みしま児童センター
	鈴木 さやか	(愛媛県) 四国中央市みしま児童センター
	若松 幸子	(愛媛県) 四国中央市みしま児童センター
	山下 洋一郎	(愛媛県) 松山市中央児童センター
	藤原 伊津子	(愛媛県) 松山市中央児童センター
	山下 順平	(愛媛県) 松山市南部児童センター
	山本 悠生	(愛媛県) えひめこどもの城



第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ 報告書

令和7年3月発行

第19回全国児童館・児童クラブ大会えひめ実行委員会
〒791-1135 愛媛県松山市西野町乙 108-1 えひめこどもの城